

西朋

26

西朋登高会

SEIHOU The Organization of The Climbing



9514 Water Climb
at Mandano River [和賀山塊・マンダノ沢]
at August

*Spring, Summer,
Autumn and Winter !*

*Water, Rock,
Ice and Snow !*

9621 Water Climb
at Sagoi River
at October
[谷川・サゴイ沢]



西朋登高会

SEIHOU The Organization of The Climbing

9612 Water Climb at Mikagura River at August [南会津・御神楽沢]



Welcome to The World
of The Climbing!!

SEIHOU 26
By SEIHOU Climbing Organization



9523 Winter Climb at Mt. Siomi at January [南アルプス・塩見岳]

西朋登高会

SEIHOU The Organization of The Climbing



9630 Ski Tour
at Mt. Kagura
at March
[上越・神楽峰]

*Let's have a fun time
together OK?*



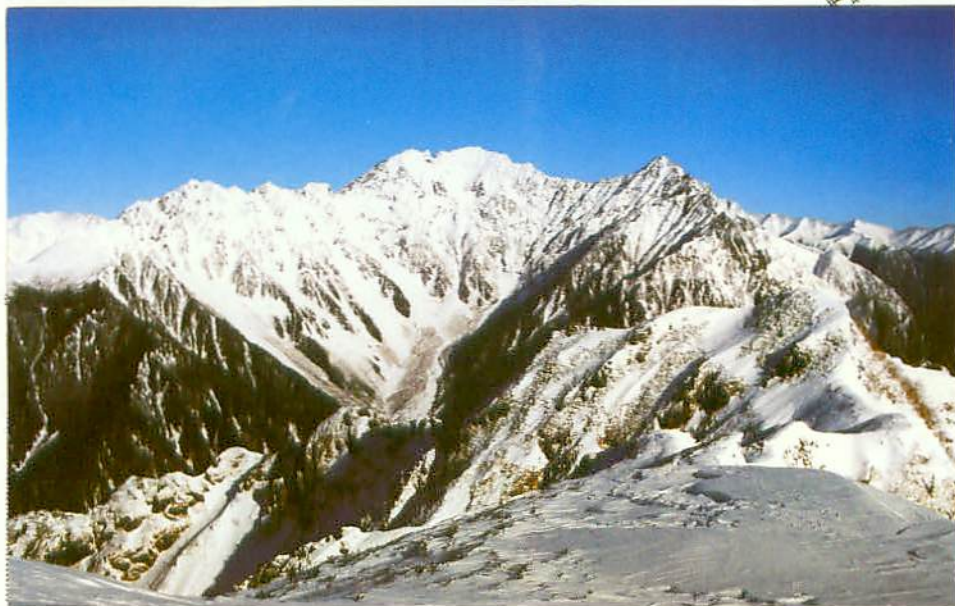
9612 Water Climb
at Mikagura River
at August
[南会津・御神楽沢]



9626 Winter Climb
at Mt. Kasumisawa [北アルプス・霞沢岳]
at January

*Next, You Will Find
The Document of
The Climbing!*

View of Mt. Hotaka
from Mt. Kasumisawa [霞沢岳から穂高連峰の眺望]



西朋登高会

SEIHOU The Organization of The Climbing

CONTENTS

● 山行総覧 P. 2

● 山行記録

○ 1993年度 P. 7

○ 1994年度 P. 15

○ 1995年度 P. 27

○ 1996年度 P. 41

● 随筆 P. 54

● 西高ワタ-フォーゲル部活動報告 P. 55

● 西朋登高会会則 P. 57

山行総覧

山行No.	期日	山域/山行形式：山行名	パーティ
◎ 9301	4/17~18	北アルプス/ST：鹿島槍 大冷沢西沢	山田・上野
◎ 9302	5/1~2	東北/ST：鳥海山～萩川	山田・上野・額賀・高橋
9303	5/4~5	戸隠：高妻山	青谷 他1
9304	5/15	富士山/ST：富士山頂～御殿場口	青谷・山田・上野・内倉
◎ 9305	7/3	丹沢/WC：一ノ瀬川 龍喰谷	上野・額賀
9306	8/7	北アルプス：焼岳	内倉・緒方 他2
	8/28~29	西朋祭 秩父浦山郷 ツキノワ荘	山野・渡辺・青谷・中野 吉田・山田・萩田・上野 内倉・高橋・緒方・内田 他3
9307	9/12~13	木曾：御岳	内倉・緒方 他2
◎ 9308	10/2	那須/WC：阿武隈川 南沢右俣 ～甲子山～大白森沢下降	青谷・上野
◎ 9309	10/16	丹沢/WC 谷太郎川 鳥谷待沢左俣	上野・高橋・清水
◎ 9310	1/2~3	八ヶ岳東面/VR：旭岳東陵	上野・高橋

◎印は記録有り

山行形式 凡例


記号	名称
ST	山スキー
WC	沢登り
VR	バリエーションルート
IC	アイスクライミング
RC (T)	ロッククライミング (トレーニング)
FC (T)	フリークライミング (トレーニング)

1993年度 (平成5年度)

山行No.	期日	山域/山行形式：山行名	パーティ
9401	4/2	信州/ST：根子岳	西入 他1
◎ 9402	4/4～5	東北/ST：尿前～焼石岳	青谷・上野
9403	4/9	谷川連峰/ST：平標岳	西入 他1
◎ 9404	5/7	帝釈山脈/ST：田代山	青谷・上野
◎ 9405	5/28	北アルプス/ST：扇沢～針ノ木岳	山田・上野
9406	7/9	ハヶ岳：蓼科山	玉田 他1
9407	7/24～25	ハヶ岳：赤岳～阿弥陀岳	玉田 他1
◎ 9408	8/8～11	北アルプス：鹿島槍～五竜～唐松岳	玉田 他1
9409	8/13～16	東北：月山 朝日連峰：大朝日岳	内倉・緒方
◎ 9410	8/20～21	飯豊/WC：実川 前川本流 中退	上野・額賀
	8/27～28	西朋祭 秩父浦山郷 ツキノワ荘	林武・山野・青谷・吉田 山田・加藤・上野・玉田 内倉・高橋・緒方・清水 他6
◎ 9411	12/30	東北/ST：鬼首～禿岳	青谷・上野
◎ 9412	2/19	日光/IC：雲竜溪谷	青谷 他1



1994年度（平成6年度）

 山行総覧

山行No.	期日	山域/山行形式：山行名	パーティ
○ 9501	4/14	東北/ST：葉山	上野
9502	5/5	関東RCT：日和田山	山野・上野・緒方・土田
9503	5/6～7	奥多摩/WC：犬麦谷	加藤 他3
9504	5/13～14	奥秩父/WC：鶏冠谷右俣	加藤 他3
○ 9505	5/18～19	USA/RC:Cannon Cliff	額賀 他1
○ 9506	5/26～27	尾瀬/ST：燧ヶ岳	山田・上野・尾崎
9507	6/10～11	北アルプス/ST：針ノ木岳	加藤
9508	6/23～25	北アルプス/RC：穂高屏風岩東壁雲陵ルート	博多 他1
9509	6/24	丹沢/WC：キュウハ沢	加藤・上野 他1
9510	7/15～16	南アルプス/WC：鳳凰三山 白井沢	加藤 他4
○ 9510'	7/22	谷川/WC：白毛門沢	加藤・上野 他3
9511	8/12～14	下田川内山塊/WC：鎌倉沢	加藤 他2
9512	8/12～15	北アルプス：北穂高岳～奥穂高岳	玉田 他1
9513	8/13～16	ハヶ岳：天狗岳～編笠山	尾崎
○ 9514	8/13～15	和賀山塊/WC：堀内沢 マンダノ沢	上野・額賀
9515	8/26～27	西朋祭：秩父浦山郷 ツキノワ荘	吉田(慎)・山野・渡辺 青谷・西入・上野・額賀 高橋・緒方・清水・内田 博多・佐々木・土田・尾崎 西原・清水(西高生) 他6
9516	9/9～11	谷川/WC：湯槍曾川本谷	博多 他3
9517	9/23	ハヶ岳/WC：赤岳沢	博多 他3
○ 9518	9/26～30	谷川：平標山～谷川岳～茂倉岳 ～朝日岳～白毛門山	尾崎
9519	9/30	谷川/WC：米子沢	吉田(慎)・山野・中村 上野
9520	10/22	/RC：太刀岡山 鉄岩	博多 他1
9521	11/3～5	奥多摩：雲取山～長沢背陵	尾崎
○ 9522	12/1～3	中央アルプス/VR：黒覆尾根 冬山偵察 越百山 雪訓	上野・尾崎
○ 9523	1/2～5	南アルプス：三伏峠～塩見岳	上野・高橋・尾崎
9524	1/12～13	伊豆：天城山	尾崎
9525	2/27～29	ハヶ岳：赤岳・硫黄岳	尾崎・西原
9526	3/2～4	ハヶ岳/RC：小同心クラック 赤岳主陵	博多 他2
○ 9527	3/16	上越/ST：苗場 神楽峰	吉田(慎)・山野・山田 上野

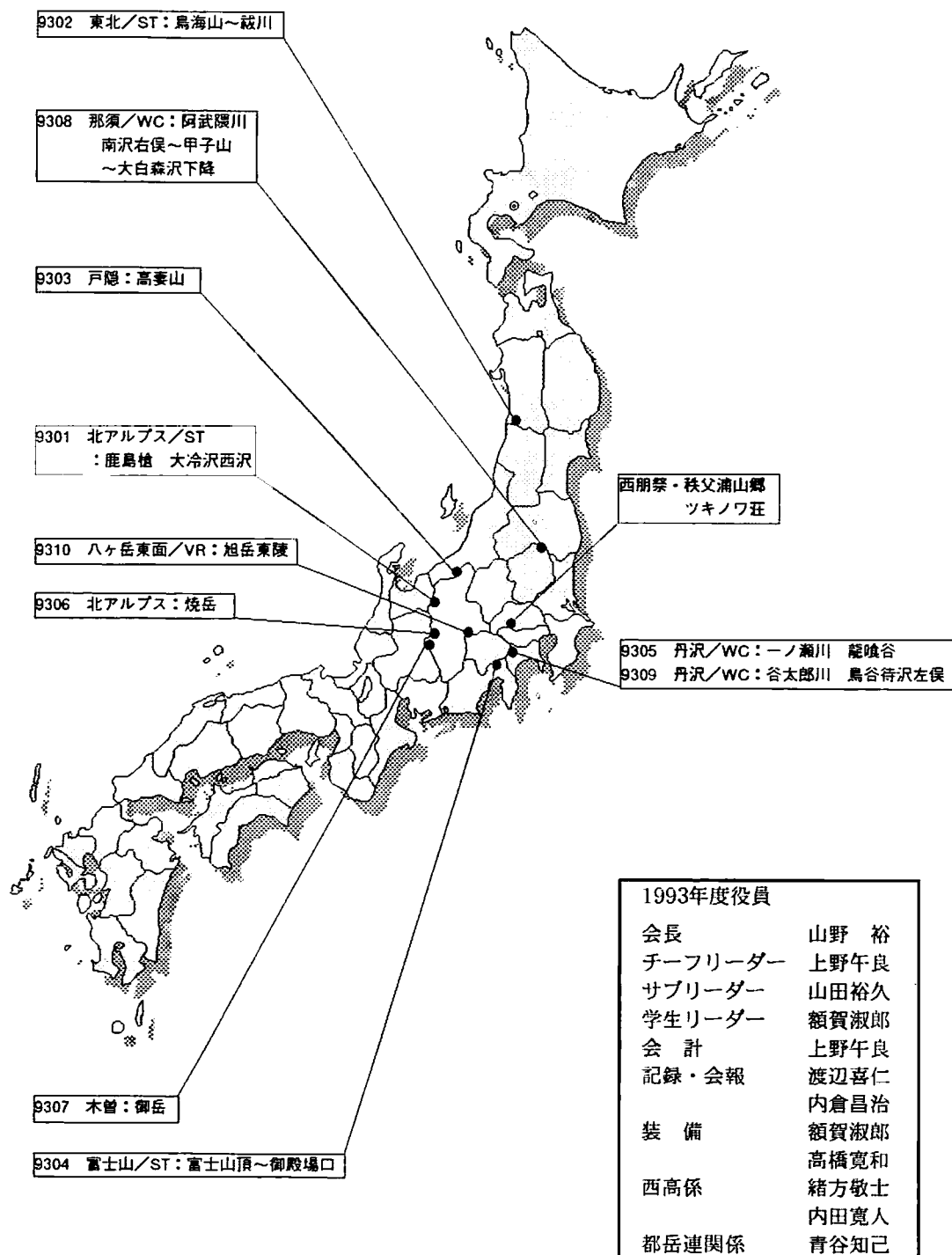
1995年度(平成7年度)

山行No.	期日	山域/山行形式：山行名	パーティ
○ 9601	5/3~4	北アルプス/VR：爺ヶ岳東尾根～鹿島槍	博多・尾崎・西原・灘吉
9602	5/18	奥多摩/WC：大雲取谷	加藤 他5
9603	5/30~6/2	西丹沢：大室山～山中湖	尾崎 他1
9604	6/15	日和田山/RCT	
9605	6/15	丹沢/WC：勘七ノ沢	加藤 他4
9606	7/12~14	南アルプス/RC：北岳バットレス	博多 他1
9607	7/20	奥多摩/WC：丹波川本流	加藤 他4
○ 9608	7/21	比良/WC：ヘク谷～蓬萊山	西原 他2
9609	7/31	北アルプスRC：錫杖岳 前衛フェース	博多 他1
9610	8/7~11	南アルプス：塩見岳～間ノ岳～農鳥岳	尾崎・清水（西高生）
9611	8/10~12	下田山塊/WC：光来出沢	加藤 他3
○ 9612	8/15~18	南会津/WC：袖沢 御神楽沢	上野・額賀・高橋・尾崎
9613	8/23~27	北アルプス/RC：剣岳 ハツ峰 N峰	西原・灘吉 博多 他1
9614	8/24~25	西朋祭：秩父浦山郷 ツキノワ荘	
9615	8/28~31	北アルプス：餓鬼岳～燕岳	尾崎・清水（西高生）
9616	9/4~6	南アルプス/RC：北岳バットレス	博多 他4
○ 9617	9/7~8	大峰山系/WC：川迫川 モジキ谷	西原 他4
9618	9/24~26	北アルプス/RC：屏風岩東壁	博多 他1
9619	10/3~5	中央アルプス：空木岳～越百岳	尾崎 他1
9620	10/12~13	北アルプス/RC：屏風岩東壁	博多 他1
9621	10/12~13	谷川/WC：清津川 サゴイ沢	吉田（慎）・山野・渡辺 上野
9622	10/22~23	北アルプス/RC：明星山 P6南壁	博多 他1
9623	11/6~8	奥秩父：金峰岳～甲武信岳	尾崎
9624	12/4	北アルプス：乗鞍岳 雪訓	博多 他1
9625	12/19~20	ハヶ岳/VR：阿弥陀岳北陵	博多 他1
○ 9626	12/28~30	北アルプス/VR：霞沢岳西陵	加藤・上野・高橋・尾崎 西原・灘吉
9627	1/6~7	ハヶ岳/VR：石尊陵 裏同心ルンゼ	博多 他1
9628	2/17	ハヶ岳/IC：蓼科山北面 春日溪谷	博多 他1
9629	2/28	奥秩父/IC：笛吹川東沢 乙女ノ沢	博多 他1
9630	3/15	上越/ST：苗場 神楽峰	吉田（慎）・山野・上野 尾崎
○ 9631	3/23	大菩薩：大沢山～笹子峠	尾崎 他1
9632	3/26	ハヶ岳/IC：広河原沢3ルンゼ	博多 他1
9633	3/28~29	奥多摩：雲取山～飛竜山	尾崎

○印は記録有り

1996年度（平成8年度）

山行記録



1993年度 (平成5年度)

● 9301 Area 北アルプス Style Ski Tour

Mt. 鹿島槍 大冷沢西沢

DATE : 1993 (H5) 04/18

MEMBER : 山田・上野

可能ならば北俣本谷を滑りたいと、大望を胸に抱いて上野と2人夜の中央道を町へと向かう。今年は雪が多いのか、大谷原に入るだいぶ手前で道が雪で閉ざされ進めなくなる。車の中で仮眠の後、シールを付けて林道を歩き出す。

西沢出会いからは西沢にコースを取り、順調に登っていく。先行者が1人いるようだ。次第に雪渓は傾斜を増し、赤岩尾根が近くなっていく。天気が良いせいかな雪がかなり腐っており、キックターンにも難渋する。まわりでは時々ミシッという音がし、雪崩れそうで嫌な感じだ。思いのほか時間がかかって、やっと赤岩尾根の

2300m付近にでる。ここから見る主稜線には巨大な雪尻が張り出し、北俣本谷などとても滑り込めそうな感じがしない。登りで時間を費やしてしまったことも考え、早々に西沢を下ることにする。腐りきった雪にターンもままならず、大消耗して車に戻る。僕たちの力では、まだまだ北俣本谷を滑ることは無理なようだ。

● 9302 Area 東北 Style Ski Tour

Mt. 鳥海山～葦川

DATE : 1993 (H5) 05/02

MEMBER : 山田・上野・額賀・高橋

コースタイム：

5/1 荻窪700→2000葦川

5/2 葦川645→1000七高山1100→1200葦川

5月1日

4鳥海山・月山という東北の名峰2つを一気に滑ろうという計画を立てて、速いのをものともせず車で出かけることにする。

早朝、まず鳥海山を目指して東京を出発する。鳥海山は山頂から多くの滑降コースを選ぶことができるが、今回は滑降距離の長い百宅からのコースを選ぶ。途中道に迷いながら、夕暮れ迫るころやっとの思いで大清水山荘への林道入り口にたどり着く。さあ、ここからは一本道で迷うことはないと思っていると、突然林道に雪が現れる。4月下旬には除雪されるというコースガイドを信じて、現地への確認を怠ったこ

Mt.Tyoukai 鳥海山山頂からの大滑降



とを悔やんでも後の祭り。ここから林道を歩く気合もなく、さあどうするかと協議した結果、祓川までは除雪されているだろうからそちらのコースへ回ることとする。こういうときには車は便利だ。結局、祓川に着いたのは夜の8時過ぎ。長い移動日だった。

5月2日

翌日は快晴。昨晩は暗くて良く分からなかったが、さすがにこちらの入山口にはスキーヤーが多い。昨日の運転の疲れが残るが、太陽にも後押しされて、シールを付けて登り始める。七高山の肩に出る急斜面に雪上車の後があり嫌な予感がしていると、案の定、後ろから雪上車が迫ってくる。以前登った岩木山もそうだったが、一生懸命歩いて登っているところが雪上車に追い超されるとがっかりくる。それでも山頂からは日本海側の海岸線も一望でき、気分も上々となったところでお楽しみの滑降に入る。

雪も適度にしまっていて、快適にターンを決

めていくと、あっという間に祓川が近づいてくる。祓川直前の緩斜面では手こぎを交えながら1時間程で滑りつき、1つめの鳥海山スキーを終える。

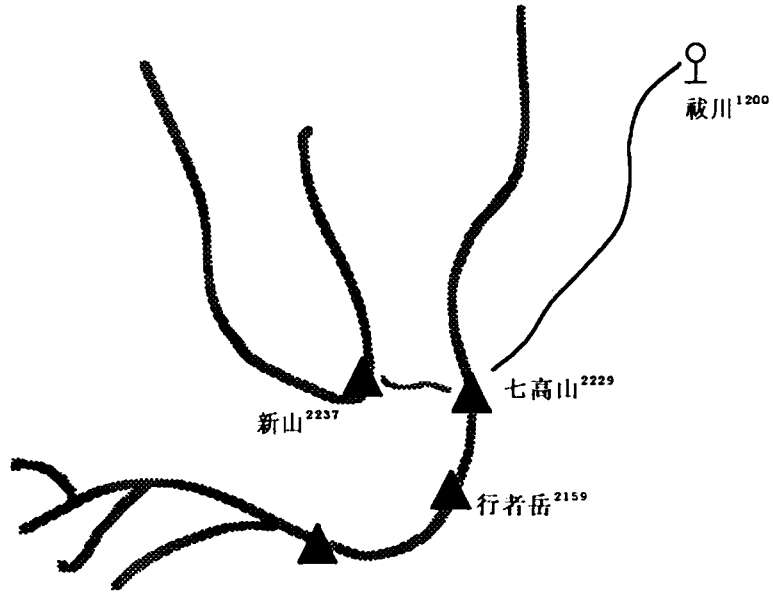
その晩は祓川の駐車場に泊まるのも寂しいし、風呂にも入りたいということで、日本海側の温泉へ行くことにする。地図をみると象潟という、あまり、聞きなれない町に温泉があるようだ。早速、象潟を目指して車を走らせる。象潟の町から少し山に入ったところに国民宿舎があり、温泉にも入れてくれた。夜は国民宿舎からさらに山側に入った、キャンプ場に幕営する。

5月3日

今日は次なる目標、月山を目指す。ところが、どうも天気の方がさえない。日本海の海岸線沿いに車を走らせるが、月山は雲の中。昨日、温泉につかり、すっかり里心がついてしまった4人には、どうもあの雲の中へ入っていく気合いが湧いてこない。ということで、弱く

も今日のうちに帰京することにしてしまう。そのまま一気に新潟まで走り、関越道経由で東京へ戻った。

当初は東北の独立峰2つを一回の山行で滑ってしまおうというゴージャスな計画だったが、長距離ドライブのついでに鳥海山を滑りましたみたいな、何ともさえない山行となってしまった。反省。



● 9305 Area 丹沢 Style Water Climb

Mt. 一ノ瀬川 竜喰谷

DATE : 1993 (H5) 07/03

MEMBER : 上野・額賀

早朝、車で東京をたち、一ノ瀬林道まで入る。夕べの雨が上がり、天気は上々だが、水流は多く、一ノ瀬川本流の渡渉に手間取る。出合下流よりも、上流での渡渉の方が良いようだ。

4m幅広の滝、板状の岸壁を越え、下駄小屋の滝は巻く。雨上がりの強烈な日差しが照りつけ、緑がまぶしい。8m逆くの字の滝、10m曲滝はそれぞれザイルを出して登る。あとは5m程の小滝を心地よい日差しの中、快適に越

えていくと、ボサのかぶった小広い平地に出た。そこに大常木林道と思われる小径が横切っていた。

廻行時間約3時間程で、あっけなく終了した。あとはただただ平坦な大常木林道を三ノ瀬集落へ下った。

「竜を喰む谷」という程の厳しい谷ではなかった。

(上野 記)

● 9308 Area 那須 Style Water Climb

Mt. 阿武隈川 南沢右俣～甲子山

～大白森沢下降

DATE : 1993 (H5) 10/02

MEMBER : 青谷・上野

前夜のうちに車で甲子温泉まで入り、仮眠し、翌朝遡行を開始する。

10m～15m程度の滝が続くが、どれも適度な難しさで快適な滝登りができる。10月であるが、紅葉にはまだ早いようだ。水も暖かい。30mの奥の大滝、トイ状のナメを越えて、奥の二股に到着。

やがて小沢となり、藪漕ぎとなるが、ここ

からが長かった。簡単に尾根上の縦走路に出れるとばかり思っていたが、そうはいかなかった。藪自体は濃くないものの、地形が台地状でどこが尾根となっているのかわからない。右往左往した後、ようやく登山道に出た。

帰りは甲子温泉に浸かってのんびり帰った。

(上野 記)

Mt. Koushi 南沢右俣の滝を登る



● 9309 Area 丹沢 Style Water Climb

Mt. 谷太郎川 鳥谷待沢

D A T E : 1993 (H5) 10/16

MEMBER : 上野・高橋・清水

全体的に小規模な滝がトイ状に続き、やや暗い霧囲気の沢である。

左俣に入り、詰めは枝沢が幾多にも入り込みルートファインディングに神経を使う。

最後の詰めは、急斜面の泥壁で、トップの清水は難なく登るが高橋・上野の2人は相当に難儀して登る。すぐ20m程上には登山道があ

り、人が歩いているのが見えるが、なかなかそこまでたどり着かない。登山道に出るまでのほんの20m程の泥壁を登り終えるのに小1時間もかかってしまった。上で待ってくれていた清水君、お疲れ様でした。

(上野 記)

● 9310 Area 八ヶ岳東面 Style Winter Variation

Mt. 旭岳東稜

D A T E : 1994 (H6) 01/02~01/03

MEMBER : 上野・高橋・清水

冬期八ヶ岳……。懲りずにマタマタやって参りました。我々二人が組むと晴れたためしのないこの山域。(いや、他の山域もか?)しかし、お手軽感も手伝ってやめればいいのに結局又来たのでした。

1/2

早朝、上野氏のカッコイイ4WDカリブをブイブイ言わせ、眩しい清里の歓迎ポディーブローを食らい、八ヶ岳牧場に乗り着ける。早速そそくさと身支度にはいる。し、か、し、朝もはよから何でいるかなー、もー、観光客。ここで目を会わせてはいけない。下手をすると動物園のしろくまくと化してしまう。

ふとお空を見上げると目に涙が「僕って何でこんなことしてるんだらう?」違う、何と晴れているではないか!甘い期待を殺しつつ見飽きた林道をチンたら歩く。積雪はほどほどにあり、標準くらいか。途中から尾根沿いに高度を上げていく林道を離れ、そのまま真直ぐ河原へ入る。前に天狗尾根に来た時は間違えて上の林道へ入ってしまって、煮え湯を飲まされた所だ。さして面白くない薄暗い河原をテレテレ歩くと程なく寂れた地獄谷の小屋に辿り着く。すぐさまテントを張り、とっとと潜り込む。外には他に2、3張りのテントがあった。飯食って寝る。

1/3

今日も晴れている。食事もそこそこに早速尾根取り付きへ向かう。すると先行パーティーのトレースが……。手を合わせ感謝の気持を表わす。ラッセルいらずでラクチンのはずだが、アゴの出る急登ですぐにバテバテ。しかも所々に草付きのいやらしい泥壁がむき出しになっており、疎林状で高度感も出てきたことも手伝って非常にビビル。晴れたら晴れたで怖いものだ。人間て贅沢だ。やっと尾根上森林限界に出た時には、バテ&ビビりでイッパイイッパイ。景色はいいがナイフリッジ状で怖い。

程なく核心部の5段岩場に辿り着く。先行パーティー（3名）がはり付いている。内2名がツルベで下部3段を登り（結構苦戦してた）上部2段は左側の疎林斜面にエスケープして巻いていた。残りのリーダーらしき1名は岩へは取り付かず初めから左側の疎林斜面ルートに入り、とっとと上へ抜けてしまう。

ツルベの二人組が難儀しているのを待っている間に時間だけが容赦なく過ぎていき何時しかやる気も失せてきた。巻きルートも怖そうだし私は結婚前の大切な身体。先行二人組がどうか抜けるころにはもういい時間になっていた。引き返すリミットだ。上野氏のみ、取り付いて登ってみる。私も取り付いてみたが、すぐにGiveUp。とっとと下る。

天場に着くとすぐテントをたたみ、逃げるように牧場へ。薄暗くなってきた頃4WDカリブの前に到着。やれやれ。あーもーこわいのやだなあ。し、か、も、何でいるかなー、観光客。

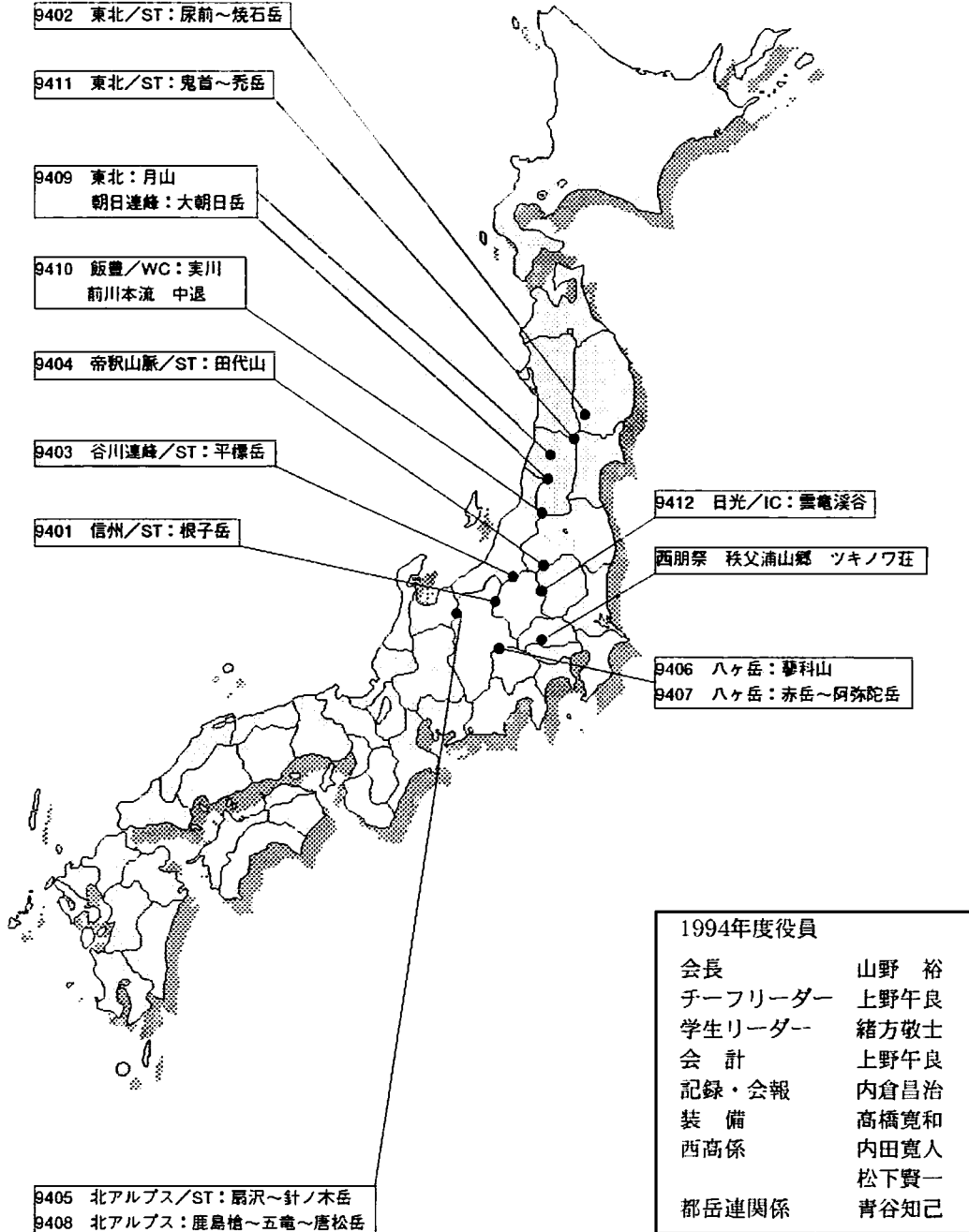
Mt.Asahi 旭岳東稜の5段岩場を登る先行パーティー



かぼちゃホウトウでも食ってはよ帰りまひよ。

（高橋 記）

山行記録



1994年度 (平成6年度)

9402 Area 東北 Style Ski Tour

Mt. 尿前～焼石岳

DATE : 1994 (H6) 04/04～04/05

MEMBER : 青谷・上野

Mt. Yakeishi 銀明水小屋にて

4 / 4

焼石はちょっと気になっていた山である。アプローチが長いので二の足を踏んでいたが、ようやく実現した。

朝の水沢から、広くなだらかな山容が白く輝いて見える。車は石淵ダムの堰堤先の車止に止める。山麓は雪解けも進み、ふきのとうもあちこちに見える。しばらく

は、スキーをかついでの徒歩となる。

古い林道入り口を目印にして、山に分け入る。人の痕跡もなく、我々だけの世界が広がる。しばらくはブナの幼樹が密生してうるさく、尾根も判然としないが、しばらくでブナの巨木の点在する斜面になる。ツアー用の標識も多く、安心感を与えてくれる。途中はなだらかな斜面が断続し、稜線はなかなか近づいてくれない。左上方に、険しい尾根を仰ぐようになってくると、樹林もまばらになり銀明水の避難小屋。天気が悪ければみつけるのに苦労しそうだ。5時間あまりの登行のすえたどりついた小屋は、東北の山の避難小屋の例に漏れず、きれいで、すきま風も入らず、すばらしい。頂上は翌朝のアタックとする。

4 / 5

この日も快晴に恵まれた。シールをつけて、



広大な斜面をトラバース気味に頂上をめざす。左の尾根がようやく目の前に迫ると、その奥にはじめて焼石の本峰が姿をあらわした。こじんまりとした台形の頂である。左手よりとりつき、ひとのぼりで頂上に立った。目の前の栗駒、神室、遠く鳥海と素晴らしいパノラマがひろがっていた。

頂上台地をぐるっとひとめぐり、気持ちのよいシュプールが描かれた。あっというまに避難小屋にすべりこむ。慌てる山行でもないのだが、目的を達してしまうと下山したくなるものだ。そのまま荷物をまとめ下降に入る。多くがなだらかな直滑降。ぐんぐんと距離がはかどる。最後の幼樹林にまた少してこずったが、無事林道に出ることができた。石淵ダムに戻ると、一段と春の気配。石淵に新しくできたボーリングでポンプアップした温泉につかり、疲れを癒した。

● 9404 Area 帝釈山脈 Style Ski Tour
Mt. 田代山

DATE : 1994 (H6) 05/07~05/08

MEMBER : 青谷・上野

5月に入ってはいるが、豪雪の会津ならまだ雪もあるにちがいないとの思惑で、田代山を目指した。前日に南面の林道の車止まで入る。朝よく見ると、車止の脇を入れることが分かり、そのまま侵入。田代山の南に伸びる尾根の取り付きに車を置く。

この尾根は地図で見る限り、スキーでも何とかなりそうと期待したが、いかんせん雪がない。スキーはひたすら背負ったままでの半藪こぎ。頂上台地直下の斜面に期待をつなぐも、急

すぎてまもなく。飛び出した頂上付近の湿原は見事に雪が消えて木道を歩く始末であった。天気は快晴、2人で独占する頂上台地はそれですばらしかった。ただ、正面に見える会津駒ヶ岳が、眩しくたっぷり残雪を輝かせているだけに、何ともうらめしい。一角の残雪で憂さを晴らし、また山スキーを背負って、半藪こぎに突入した。

Mt.Tashiro 田代山山頂の木道を行く



● 9405 Area 北アルプス Style Ski Tour

Mt. 扇沢～針ノ木岳

DATE : 1994 (H6) 05/28

MEMBER : 山田・上野

コースタイム :

扇沢630-950針ノ木峠1020-1110針ノ木岳

1220-1310大沢小屋1340-1410扇沢

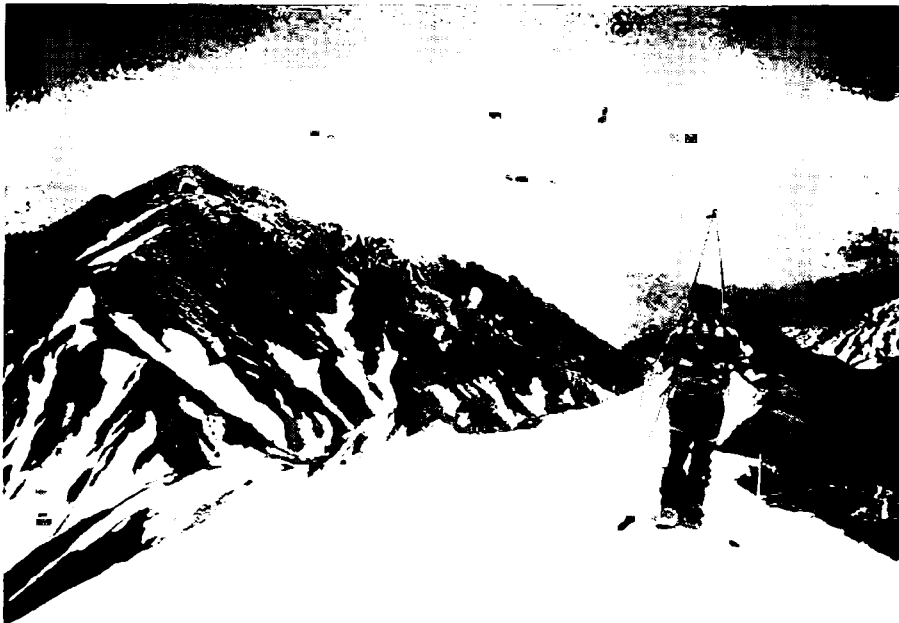
昨年の鹿島槍ヶ岳西沢があまりに楽しくないスキーだったので、今春はもう少し快適なスキーをと、針ノ木大雪渓を目指して、前夜扇沢に入る。しばらく林道を歩いて、大沢小屋を過ぎると大雪渓の上に立つ。雪が結構しまっているの、つば足で登ることとする。二股のあたりが少し急傾斜だが、そこを越えると斜度が落ちて、針ノ木峠に着く。峠からも意外と距離があって1時間程かかって針ノ木岳山頂に立つ。

剣岳や立山、遠くは槍ヶ岳の眺望を堪能した

後、スキーを付けて大滑降の開始である。下りは峠までは戻らず、途中から右股を目指して滑り込む。雪は適度にしまっていて、快適な滑降である。右股に入ってから二股までは急傾斜でショートターンが楽しめる。下部はデブリや落石で若干滑りにくかったものの、一気に雪渓の末端まで滑り込む。といきたいところのだが、登りにつってしまった足はもう限界に近く、数回ターンをしては休むという情けない状態で、やっとこさたどり着く。

今回はほとんど針ノ木岳の山頂から滑ることができ、また、雪質もバッチリで、山スキーの醍醐味を堪能した山行であった。

Mt.Harinoki 針ノ木峠から針ノ木岳へ向かう



9408 Area 北アルプス Style Climb

Mt. 鹿島槍ヶ岳～唐松岳

DATE : 1994 (H6) 08/08～08/11

MEMBER : 玉田紀子 他1名

8月8日

長野県民となって初のアルプス行き。長野の人は「なぜわざわざ山に登るのか、とんと理解できない」といった風なので、同じ団地の人に見つからないようにこっそり家を出た。電車を乗り継ぎ10時過ぎ信濃大町着。タクシーで登山口となる扇沢合まで行った。今日は3Pの行程だから気分はのんびりしていた。

しかし、とにかく暑くて、つらかった。3Pでしかも急登ではないから・・・と高を括っていたせいか以外につらい登りだった。3大バカ尾根のブナ立て尾根を登った時の方がよっぽど楽だったような気がした。気を引き締めて登りにかかるのと、今日は楽チンとへらへら登り始めるのでは体の具合がこうも違うか・・・と思った。適度な緊張感が必要なのだ。

展望もあまりきかないただ暑いばかりの樹林帯を抜けようやく下界より稜線が近くなってきた頃には、ひたすら地面を見て1歩1歩、歩を進めるのがやっとだった。一方主人は小屋が見えると元気が出たらしく、とっとと先に行ってしまった。種池小屋。写真でよく見るその小屋は剣をバックにおとぎばなしのかわいい小屋のイメージだった。

ところが、私を迎えてくれたその小屋は、すっかり疲れてしまった私の姿を映したような少々くたびれた小屋だった。

夕食を作るうちにガスがなくなり、そのうち雷が鳴り出した。その夜は北アルプスの稜線だというのに暑かった。今までアルプスの稜線で暮らす時は（たとえ少し標高が低くても）、い

つもありったけの服を重ねて着て、やっと息ができるほどの穴を残してシュラフに潜り込んで寝ても、朝方寒くて寒くて起きてしまっていた。しかしその晩は雨具を着ないで、シュラフのファスナーを開けて寝ても大丈夫だった。こんな事は初めてだった。どうやら下界でも、ものすごい猛暑の熱帯夜だったらしい。

8月9日

種池小屋を5時半に出て鹿島槍に向かった。やっぱり稜線歩きは気持ちがいい。ルンルンと幸せ気分で先へ行く。振り返れば少々くたびれた種池小屋は、ちゃんと写真集で見られるような「剣をバックにおとぎばなしのかわいい小屋」に見えた。遠くから眺めていた方が素敵な小屋だ。

だらだらと登って爺ヶ岳に着いた。稜線の続きみたいな感じで通過した。朝のすがすがしい空気の中を赤い屋根の冷池山荘へ下っていく。なんとも美しい形の鹿島槍がぐんぐん大きく近づいてきた。

行き違う人たちは表銀、裏銀、ダイヤモンドコースとは違って、ホントに山好きという感じの人ばかり。私も久しぶりに静かな落ち着いた気分で山に浸っていた。

冷池山荘で目の前に迫る鹿島槍をたっぶり味わいながらちよびりくつろぐ。とても幸せな気分。

さて、と鹿島槍を目指す。この道は高山植物が特別豊富なわけでもなく、自転車で走れそうな稜線わけでもなく、これと言った“うり”が

ないような気がするけれど、何もなくてただ自分の周りに広がるアルプスにどっぷり浸かれる、ミーハーなハイカーもいないので山のルールがちゃんと守られていて気持ちがいい、これこそが“うり”なのかもしれない。というわけで、アルプスの懐にどっぷり浸かって歩を進める。

しかし、布引山を過ぎた頃からガスが出始め、とうとう鹿島槍が見えなくなってしまった。実は鹿島槍よりも五竜を楽しみにしていたのを見破られたか、鹿島槍には嫌われてしまったらしい。。

鹿島槍南峰に着いたけれど何も見えない。この先にはどっしりと五竜が構えているはず。。こっちには美しい剣が見えるはず。。しばらく待ってみただけれどガスが晴れないのでしかたなく頂上をあとにした。

北峰はトラバースルートもあったけれど折角だし、元気あるし、で寄ってみた。どこかの大学が置いていった“鹿島槍ヶ岳”という木の札が落ちていてだけで寂しいてっぺんだった。これもガスで展望はきかなかった。

あとは本日の宿キレット小屋へ下るだけである。と、足元へ目をやると下に、“直下”と言って差し支えないような視点に（ちょっと大袈裟？）、岩に紛れてぼつんとキレット小屋が見えた。「え～っあんな真下に小屋が。。あんな岩の中に小屋が。。どうして。。。」と、今までに経験したことのない驚きを感じた。そしてこの経験したことのない驚きはこのあと、どんどんバージョンアップされていった。

鎖場と梯子のオンパレード。ごつごつの岩の斜面にかろうじてついている踏み跡。どうしてここが道なのか、踏み跡があるからそこが道なんだろうけれど、とても「道」とは思えない。。どこを通っても歩いても岩の上、踏み跡をた

どつても踏み跡からはずれても大して変わらない、そんな箇所が何ヶ所もある。休憩を取る場所もなく、ひやひや半分、わくわく半分、慎重に進んでいった。



そろそろ間もなく小屋だよええ。。と思う頃ものすごいところを通過した。垂直な岩の斜面（垂直な“斜”面というのも変な形容だ。。）に鎖がついていてそこに道があるのだけれど、その道が鉄の梯子でワープしている。つまり足元（梯子の下）には何もない。右下は奈落の底に

つながるような崖・・。思わず心の中で“おかーさ～ん！！”と叫んでしまう。そして、私は！そこで主人の膝がガクガクと震えているのを見てしまった。人間は怖いと本当に足がすくんで震えるんだ・・。

無事に通過し、「もう小屋のはずだ、もういいでしょう・・」と思っていたが甘かった。

キレット小屋は岩と岩の鞍部に目いっぱい小屋が建っているの、最後、小屋が目の前、ほんのすぐそこにあるというのにちっとも安堵できない。最後の最後も崖を降りて小屋に着く。本当に義経のひよどり越え（だったかな）といったふうである。ここで落石でも起こせば「小屋直撃」である。

やっと、1日が終わった。距離にすればそれほど歩いていないはずなのに、緊張の連続でちょっと疲れてしまった。

キレット小屋の食事はそれはそれは豪華で「あーここまで来た甲斐があった」と満足しておいしくいただいた。（こんなに大変な思いで着いて、ご飯が貧相だったらもうやりきれないだろうなあ・・）

8月10日

さて、今日は私の行きたかった五竜だ！キレット小屋の看板で記念写真をとって出発。

といきなり岩場。すっかり目が覚める。昨日のことは夢ではなかったんだ。今日もこれから1日岩、岩、岩が続くのである。

岩のコブのようなところを梯子で登って梯子で降りる。どうしてここが道なんだ。

振り返ってみても、梯子が岩と一体化してしまっていて、よく見なければとても道があるとは思えない。

そこで写真を撮ったけれど、現像してきてから「ん？これ何撮ったんだろう・・？」としばら

く考えてしまった。よく見たら梯子がうつっていた。そうこうして小屋から2時間。北尾根の頭に着いて。頭の上は晴れていたけれど、まわりにガスがかかってしまって展望はきかなかった。

そこからもひたすら岩場をひょっこらひょっこらと過ぎていく。うわさには聞いていたけれど本当にすごいなあ。こんなにひたすら岩ばかりのところがあるなんて・・。目的の五竜はそこに見えるけれど、何しろ岩ばかりの道に時間を取られ、時間が過ぎる割にはなかなか五竜が近づかなかった。

鹿島槍はその美しい形をよく表されるけれど、私はなんともごつごつの男らしい五竜の方がずっと魅力的に思えた。その男らしい五竜をじっくり眺めながら難儀難儀でやっとのことで、頂上に到着。

幸せ感じて、たっぷり味わう。目の前には深い谷を隔てて立山・剣連峰、頭の上には雲がどんどん流れていく。ものすごく気持ちいい時間だった。（やはり鹿島槍には嫌われているらしく、すぐそこにあるはずなのに鹿島槍の頭だけガスで見えなかった。）

踏みたかった五竜のてっぺんに立ち、ここからは岩場もほとんどないはずなので、ちょっぴり気が抜けていたらと唐松へ向かった。久々に(?)下界の町や、人工物の五竜とおみスキー場が見える。さっきまでの岩岩岩のまったくの山の世界、大自然の懐から次第に人の匂いのする、現実の世界へ引き戻されていく。意識が急に人間臭くなっていく。

下界の延長を感じる唐松山荘には15時ごろ到着した。夕食後には雨がぼつぼつ降り出した。

8月11日

ご来光を拝みに唐松山頂へ行った。きれいに晴

れ渡り、剣・立山から薬師・槍・穂高までを一望できた。憧れの五竜ももちろん隣にどしんと構えていた。しかし鹿島槍は五竜に隠れて見えなかった。

今回は本当に鹿島槍は隠れっぱなしである。何度見ても神妙になってしまうご来光を拝み、朝日に染まっていく白馬連峰を眺め、山頂を後にした。

ゆっくり朝食を摂り、のんびりテントを撤収して出発。雷鳥の親子と一緒に歩を進め、美しい剣・立山の景色に別れを告げ、稜線からルートに分けて下山にかかる。りりしい五竜をいつまでも見ていたかったけれど、雲が元気にもくもくと湧いてきて邪魔をする。途中雪渓で雪と戯れながらぐんぐん下る。

と、私たちは目の前に見たくないものを見てしまった。そこは八方大池。人・人・人…。何だあの人の群れは…。私たちはうっかりしていた。そうだった。八方は立派な観光地だったのだ。

そんなことはうっかり、本当にうっかり忘れていて、余りの人の多さ、下界のにおいに一瞬拒絶反応を起こしてしまった。町に降りるまではもう少し、山の空気を味わっていたかった。

一気に興ざめして、がっくり来て、でもどうしようもなく、観光客に混ざって八方尾根を下っていった。昨日までのあの澄んだ空、透명한空気、山の懐に抱かれた心地よさ、それらはすべて夢と化してしまった。下山後温泉で汗を流し、気持ちを入れ替えて、帰路に着いた。

その後…。我が家にもこうのとりがやって来て、元気な男のが生まれた。これでしばらくは山はお休み。またいつの日かファミリー登山でも出来る日を心待ちに育児に励む毎日である。

(でも実は今年の夏、主人に息子を任せ、学生時代の先輩が支配人をやっている剣御前小屋へ遊びに行こうかなあ！と企んでいる…。)

● 9410 Area 飯豊 Style Water Climb

Mt. 実川 前川本流 (中退)

DATE : 1994 (H6) 08/20~08/21

MEMBER : 上野・額賀

夏合宿であるが、参加は上野・額賀の2人だけ。少し大きな沢をやるということで、飯豊の実川流域で比較的明るそうな前川とした。

前夜のうちに実川集落先の林道終点のゲートまで車で入り仮眠をとった。翌朝、曇天の中、出発。しばらくは林道をゆく。途中で雨がバラつき始め、しまいはどしゃ降りとなる。

林道上のトンネル内にて一時雨宿りをして、雨足が弱まるのを待つ。(この多量の雨が、後の鉄砲水の幕開けであるとは思ってもみなかった。) 約30分程でおさまるが、依然弱い雨足で降っている。いつまで待っても雨は完全にやみそうもないので、きりのいい所で出発とする。

湯ノ島小屋への分岐を過ぎて、前川本流沿いにつけられた山道に入る。20m程下の本流を見ると、ダムのパックウォーターのごとく水を満々とたたえていた。本流に降りられるか不安になるが、しばらく行くと本流の河原に降りることが出来た。雨は依然ショボショボ降り続けているが、飯豊の沢のスケールの大きさに胸いっぱい状態になっており、気合十分である。

まだ滝らしい滝はなく、ジャブジャブと水流の中を行き、淵をへつり前進してゆく。へつりの際どい所にはロープが残置してある。相変わらずしめりがちな天気の中、2ピッチ程進んだ所で、急に本流の水かさが増したように感じた。前に行く額賀にその旨を伝えた瞬間に水が濁り始めた。2人して「これはやばい」と感じ、急いで右岸の急な草付を5m程高巻き気味に避難した。(正午過ぎ)

数秒後、ものすごい轟音とともに、上流より鉄砲水が発生し、本流は一面濁流と化した。大きな灌木も流れてきており、水深はゆうに1mは上昇したようだ。水かさが増したと感じた時から、鉄砲水の通過まで約2分程であった。もし本流の異変に気付くのが遅れ、あのすさまじい濁流に呑み込まれていたらと思うとぞろぞろしくなった。



2人して草付の急斜面にザックをおろしビレイをとって、しばらく様子を見ることにするが、しばし2人で呆然としていた。本流の水が引くまでツルをかぶって、泥色に濁った川を見ながら悶々とした時間を過ごす。

3^d 時間後の午後4時過ぎに、ようやく水かさも低くなり、とりあえず安全な場所まで移動してビバークを決める。30分程前進した所で、右岸のスペースにビバークするが、夜もあのすさまじい濁流のことを思いだし、再び起きるのではないかと不安になり、眠るに眠れなかった。

翌朝、雨はあがったが曇天。水量もやや減っているようだ。2人でこの先どうするか、遡行継続か御西沢にエスケープか引き返すかで迷うが、2人とも昨日の事を思い出すと、また起きるのではないかという不安がよぎり、遡行意欲はなくなっていた。結局、引き返すことにし、せっかく来た飯豊の沢に未練はあったものの、鉄砲水の恐怖が頭から離れず、天気も依然として良くないということで一目散に車まで下る。

結果として中退に終わったが、鉄砲水の恐怖をまざまざと見せつけられ、非常に貴重な経験をしたと思っている。「豪雨の後に、集水域の広い沢に入る時は要注意」です。

(上野 記)

9411 Area 東北 Style Ski Tour

Mt. 鬼首スキー場～禿岳

DATE : 1994 (H6) 12/29～12/30

MEMBER : 青谷・上野

12/29

東北の山へ車で行こうという第3弾。古川ICから鳴子を経て鬼首に午後入る。はじめて見る禿岳は、高原のなだらかな起伏からすくっと立ち上がって格好がいい。積雪は少なめで、風も強く冷たく、スキー場はアイスバーン状態だったが、車を駐車場に置き、足慣らしで2、3本すべった。泊りは冬期休業中のゴルフ場の建物脇にテントを張る。月明かりに禿岳が輝いていた。東面に食い込むルンゼが、小規模だがアルペンの雰囲気を漂わせている。

12/30

天気はあいにくの曇り、上部はガスがかかっている。スキー場経由の尾根ルートは取りやめて、直接峠に上がる林道をたどることにした。

半ラッセル状態で黙々とたどる。峠手前で尾根に取り付く。

ここからたどった尾根は、今思い返しても記憶に乏しい。ふかふかの雪とガスの中、時折開ける視界がたより。頂上稜線にあがる直下が、なだれそうな急斜面でスキーをはずしてはいあがる。細い稜線をたどるとしばらくで頂上台地。立派な標石が頂上を示していた。上野と交互に記念写真を撮り、しばらくの休憩の後、禿岳山頂をあとにする。下りもまた記憶に乏しいので、快適な滑降とはならなかったはずだ。峠の手前でやっと山容や背後の山々が姿をあらわす。林道は鈍行列車のごとし。

帰りは、吹上温泉の間欠泉をのぞいてから、年末の夜の東北道をひた走った。

Mt.Hage 禿岳への稜線



9412 Area 日光 Style Ice Climbing

Mt. 雲龍溪谷

DATE : 1995 (H7) 02/19

MEMBER : 青谷、他1

2/19

氷のほりをやってみたいと言う同僚と、一度冬の雲龍溪谷をのぞいてみたいという私の思惑が重なって、今回の山行きになった。

車止はカギがかかっておらずかなり上部まで入ることができる。友知らず下部の氷結も期待して、中流域から沢に降り立つ。兩岸が切り立ち緊迫した部分もあるが、めぼしい氷はなく、水流をまきぎみに遡上する。一旦開け、友知らずの核心部に至る。さすがに人が集まっている。兩岸から氷柱が垂れ下がりおみごと。しばらく氷の廊下になる。200mほどでカラ滝になり空中からはしごがぶらさ

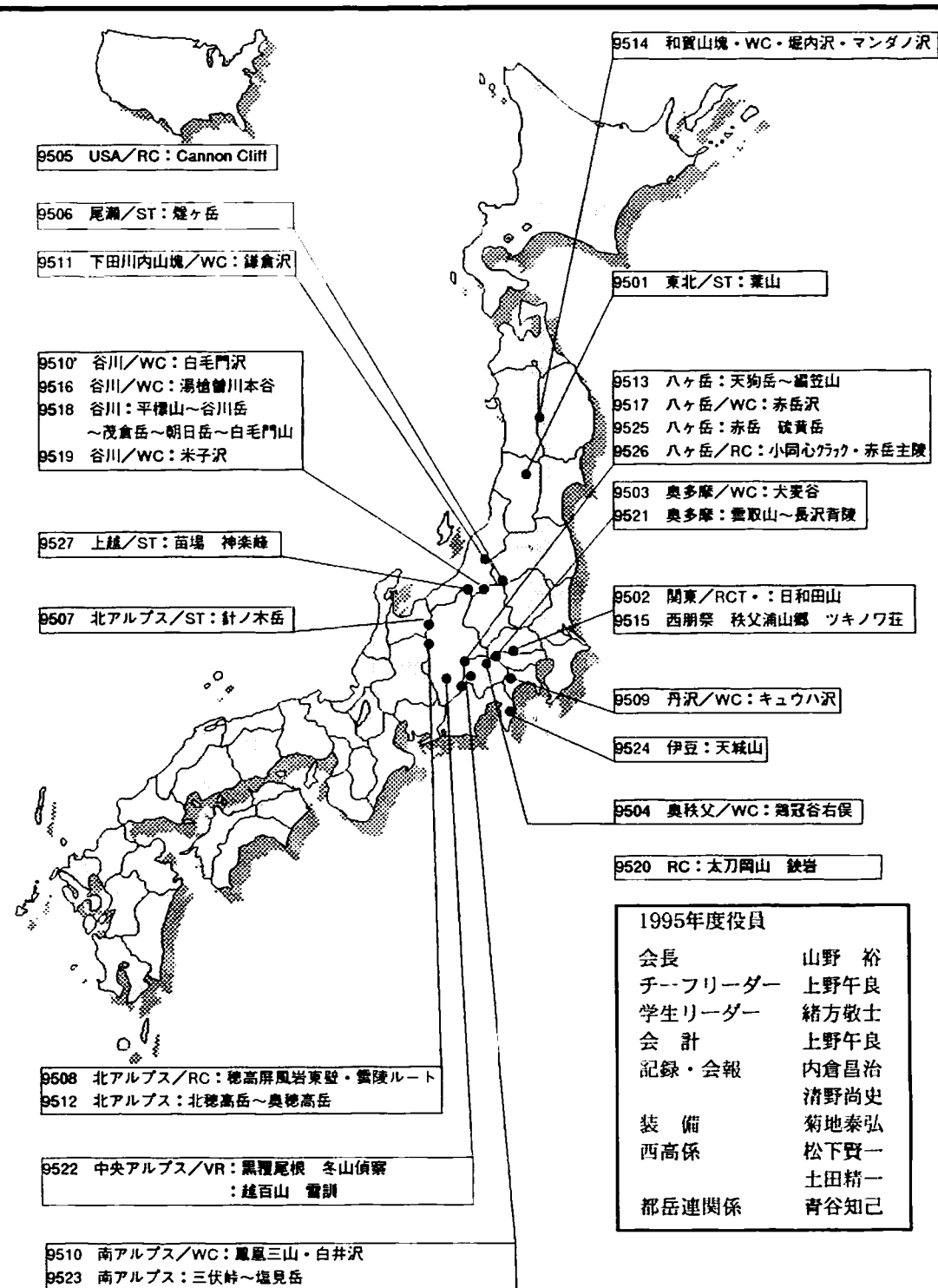
がっている。上部は厳しそうなためあきらめ、雲龍バクを覗きにいくことにする。雲流バクは本流の左岸の支流上方にかかる大滝である。下部に5m程の前衛滝が2本あり、これを楽しくダブルアックスで越えていくと、堂々たる水バクが頭上を圧倒する。予想以上の迫力にしばし呆然とする。今回は登る気構えはなくほんのとりつきで遊ぶ。下部は氷もやわらかく傾斜も緩いが、上部は垂直に近くかなりシビアな思いをしそうだ。

雲龍溪谷は手ごろな氷遊びの場。時期的にはもう少し早い方がよさそうだ。



Illustrate by Hiroko Takahashi

山行記録



1995年度役員	
会長	山野 裕
チーフリーダー	上野午良
学生リーダー	緒方敬士
会計	上野午良
記録・会報	内倉昌治 清野尚史
装備	菊地泰弘
西高係	松下賢一 土田精一
都岳連関係	青谷知己

1995年度 (平成7年度)

9501 Area 東北 Style Ski Tour

Mt. 葉山

DATE : 1995 (H7) 04/14

MEMBER : 上野

仕事柄、醤油に興味を持っている。丸大豆及び脱脂大豆と小麦で麴を作り、食塩水に仕込んで約半年～1年間熟成させて出来る醤油は、微生物が作り出すすばらしい芳香と旨味を持ち、これほど、同じ物においても各メーカーならではの特有の品質のものとなるものはないと思う。

日本には醤油醸造メーカーは大小あわせて約2000社程あり、地方へ行けば行くほど、地方色豊かな醤油に出会える。

醤油には、原料全量を麴とする「本醸造」とアミノ酸等を混合して熟成させる「新式醸造」とがあり、後者は東北地方に多く見られる醤油である。

「地方色豊かな醤油にめぐり会いたい」という、かねてからの願望があり、私の勤める会社で作る醤油原料(脱脂大豆)のユーザーが比較的多い山形県の醤油を手に入れるべく出発を思い立った。

時は4月で、ちょうど山スキーの時期である。日帰りで山スキーをやり、その後醤油とめぐり会おうというすばらしいプランを立てた。車で移動の為、わざわざ有休をとって平日であてた。

仕事を終えて、車でそのまま高速の人となる。山形自動車道に入り、夜中の1時頃、山形インター手前のパーキングエリアで仮眠する。翌朝、寒河江インターで降りて左沢集落先の林道に入り、除雪されている所まで入る。車を捨て、8時出発。

しばらくは雪の積もった林道を行き、畑集落より谷筋に入る。快適にスキーを滑らすが、ガスがかかっており、稜線に出ても視界がきかない。小僧森、大僧森を越えて、頂上までスキーで登ることが出来た。(1 1時半)

1人だと先を急いでしまい、足は筋肉痛になりかけ。案の定、下りは足がつってしまい、惨残の滑りでした。視界はきかず足はつるわで、少し滑っては止まりといった案配であったが、晴れていれば爽快な滑りが期待できる。

下山後は寒河江のビジネスホテルに泊まり、翌日念願の醤油を多数入手することができた。満足、満足!

(上野 記)



Illustrate by Hiroko Takahashi

9505 Area USA Style Rock Climbing

Mt. Cannon Cliff

DATE : 1995 (H7) 05/18~05/19

MEMBER : 額賀 他 1

アメリカのニューハンプシャー州にあるキャノン・クリフは東海岸有数の岩場として知られており、東海岸最長のピッチをもつルートがある。そこで、カナダ・モントリオールから友人2人とともに1泊2日のクライミング・ツアーを行った。

早朝車でモントリオールを出て、アメリカとの国境を越えると、昼前に早くも麓の駐車場に到着。春とはいえ、やや肌寒い天気の中、キャノン・クリフを見上げる。望遠鏡で見ると、数日前の雨のせいか幾つかの岩から水がしみ出ているようだ。いろいろ考えた結果、サブのConsolation Prize(5.8)に登ることにする。軽い昼食後ギアを揃え、取り

付きまで1ピッチ登りつめる。途中、幾つかのルートを見るが、Reppys Crack(5.8)はとても美しいクラックで印象的であった。

最初は友人のGragがトップで登る。基本的にはピレイ点以外はボルトはなく、ナチュラルクライミングである。僕自身、ナチュラルクライミングの経験は少ないため、今日はトップは控え、明日にすることにした。Gragは少々高い所へピレイしたため、3m程クライムダウンしてから2ピッチ目をゆく。2ピッチ目はこのルートの核心部(5.8)で、最初の出だしは悪い。微妙なバランスのもとで、フォックをセットする。Samの顔は真剣であった。大きくまわって登

Cannon Cliff キャンオンクリフへ向かう



る2ピッチ目とは違い、3ピッチ目は直上ルートで難なく終了。3ピッチ目終了後は、頂上に抜けるのにあともう2ピッチ残っているが、クライムダウンした方が早いためそこで切り上げた。2回の懸垂下降で出発点に戻る。時間が余ったため、Stairway to Heaven(5.10)の出だしを3人で遊びながら試登する。

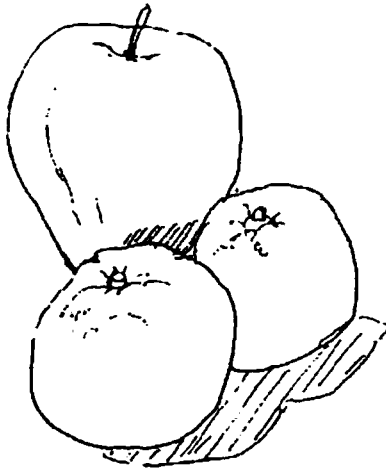
その晩はすぐそばのキャンプ場でキャンプをする。アメリカはあちこちにキャンプ場があり、車があると大変便利だ。

翌朝8時に出て、地元クライマーに勧められたWhitney-Gilman Ridge(5.7/8)に取り付く。東海岸で最も良いリッジルートだとのこと。キャノンクリフの左端にあり、瓦礫の麓から取り付く。ビレイポイントはそれぞれ広場があり、とても快適なクライミングである。1ピッチ目はルートを登り、チェンで抜ける。1ピッチ目をリードするが、やはりプルズやナツのセトには少々緊張する。2ピッチ目はGragがリードする。岩はしっかりしているが、高度感の中

で垂壁を登るのは緊張する。3ピッチ目はSamがリードする。ここは途中、下が切れていて、かなりの緊張を強いられた。しかしルンが連打され、ムーブも大したことはない。4ピッチ目は僕のリードとなる。下部は難なく越え、上部は再び切れたリッジルートとなる。その切れたリッジをレバックしてビレイをとる。しかし、ビレイ地点が狭く悪い為、Samは一度登り、クライムダウンしてしまった。5ピッチ目はGragがリードする。1箇所乗越しのいやらしいムーブがあったが、何とか切り抜ける。3時頃終了点に着き、1時間で駆け下りる。

北米の岩場は、基本的に「フュラクラミング」のため、ギアのセト等が難しく、それなりの奥行きを感じた。また、岩場で他のクライマーをよく見かける等、フリークライマーの人口は多いようだ。単にブームだけでない、根付いたクライミング活動があるという印象を持った。

(額賀 記)



山で食べたいものは？……

Illustrate by Hiroko Takahashi

● 9506 Area 尾瀬 Style Ski Tour

Mt. 燧ヶ岳

DATE : 1995 (H7) 05/26~05/27

MEMBER : 加藤・上野・尾崎

新人の尾崎君の西朋初山行。いきなり山スキーは酷とは思ったが、尾崎君はなんと父から借りたというテマクを持参していた。

車で夜中に御池まで入り、仮眠をとって翌朝出発。尾崎君先頭に上野、加藤 先輩の順で登るが、さすがに登りは若い尾崎君早い！天気は上々で、燧ヶ岳頂上からは眼下に尾瀬ヶ原が俯瞰できた。正面にはどっしりとした至仏山があった。

下山のお楽しみスキーは、加藤先輩と上野はスイスイ下るが、テマクの尾崎君は相当手こずっているようだ。普通ならもう二度と山スキーなんかやりたくないと思う位にこけて、埋まって、転がって降りてきた彼であったが、下山後は「初めての経験で充実しました」と言っていた。将来有望である。

(上野記)

Mt.Hiuchi 燧ヶ岳頂上へ向かう



● 9510 Area 谷川 Style Water Climb

Mt. 白毛門沢

DATE : 1995 (H7) 07/22

MEMBER : 加藤・上野 他3

加藤先輩と先輩の友人である三富さんとの沢登り第2弾! 前回の丹沢キューバ沢につづき、今回は少し遠出をして谷川の白毛門沢。

三富さんの沢登り意欲にはいつも頭が下がる。夏場はこの他にも頻繁に沢に入っているそう。結婚したばかり(と思う)だし、子供もいる(これは確認した)のに、よほど理解のある奥さんなのだろう。それとも三富さんのパワーで押し切ってしまうのか? 結婚前の私でも、その辺りの事情は理解できる。(と、その

時感じたように思う。が、この文章は私が結婚後に書いたものである)

さて、沢の方は、天気も快晴であり、快適な遡行であった。ザイルはく字状の滝で1回出す。ヤブのない詰めの急斜面を登ればそこは白毛門山頂であった。日差しが気持ちよく、しばしトカゲになった後に車までかけ下る。

(上野 記)

● 9514 Area 和賀山塊 Style Water Climb

Mt. 堀内沢 マンダノ沢 ~ 朝日岳

~ 生保内川下降

DATE : 1995 (H7) 08/13~08/15

MEMBER : 上野・額賀

今回はお盆で渋滞が予想され、電車を使い、東北の秘溪・和賀山塊へ出かけた。青春18キップを使い、1日かかりで盛岡までたどり着き、夜半も人の多い駅で仮眠。翌朝、始発の田沢湖線に乗り、田沢湖駅からタクシーで夏瀬ダムへ到着。発8:30。ダム手前の浅瀬を渡り、林道沿いに歩く。先行の1人が同じマンダノ沢に登ることとなった。前日来の雨で川は増水し、渡渉を繰り返す。天気は快晴で、水はキラキラと輝いている。2ピッチほどで朝日沢出合となる。(12:00) さらに1ピッチ行くとマンダノ沢出合。ここにはテントが張れそうである。支流とはいえマンダノ沢

はブナの林の中を豊かな水をたたえていた。小滝を越えながら、2ピッチ強程で明るい蛇体淵手前の河原でテントを張る。ここは幕営には最高の地である。焚き火をしながらのんびりと過ごす。

2日目は8:00に出発する。蛇体淵は左岸から大きく高巻いた。少し行くと下天狗沢出合となる。その後、水量が多かったせいか枝沢と上天狗沢との見極めに少々迷った。上天狗沢とマンダノ沢本流は、上天狗沢の方が水流が多かった。さらに進むと、水の多いナメ沢が直角に入ってきた。それを枝沢と判断し直進する。つ

きつめると急登となり、和賀山塊の全貌が見えてきた。頂上直下は一面の高山植物で、感嘆の声を上げる。頂上には生保内沢を登ってきたパーティがいて賑やかだった。朝日岳周辺の登山路は道がはっきりしておらず、沢屋のための山頂といってもよい。笹や高山植物とトンボの大群に囲まれた朝日岳は、東北の秘峰の名にふさわしく、是非もう一度訪れてみたい所だ。

朝日岳から生保内川源頭を目指して草原を下っていき、草付の高巻きをした後、10mの滝を懸垂する。さらに、10m程の滝を左岸から大きく高巻き、頂上を出て3ピッチ程の、奥の二股手前の浅瀬でテントを張る。あまり良い幕営適地はないようだ。

最終日は曇り時々雨のあいにくの天気。長い下りの為、早めに出発する。二股前で右岸を大高巻きする。上部はブナ林で比較的歩きやすく、小川から下りる。さらに2ピッチ目、左岸からの高巻きを繰り返し、ゴロツキを切り抜ける。後は、長い河原歩きとなる。途中、渡渉を繰り返す。林道終点まで3ピッチかかっていたり着く。アブの大群に囲まれ、手足をたたきながら田沢湖駅までえんえんと歩いた。

水沢温泉で長い道のりの疲れを癒し、その日は田沢湖駅近くの旅館に泊まった。折しもお盆のお祭りの最中であった。

(額賀 記)

Mt.Waga マンダノ沢に行く



● 9518 Area 谷川 Style Climb ~ Water Climb

Mt. 平標山 ~ 谷川岳 ~ 白毛門 白毛門沢

D A T E : 1995 (H7) 09/26 ~ 10/01

MEMBER : 尾崎 宏和

記録を書くのは1998年1月。あれから2年半近かった。

そのころ、僕は大学の山岳部にもワンゲルにも入る気がなかったが、山はこれからも行きたいと思っていた。なかなか一緒に行ける人がいないので、1人で何度か行って、単独もいいなと感じていた。

沼田朝いちのバスに乗るためには、どこかで駅寝しなくてはならなかった。結局、上野発最終で行って高崎で駅寝した。大きな駅の真っ暗なところというのは気分がよくない。

9/27 高崎6:14 = 沼田7:42 = 9:15法師温泉9:20
- 11:15三国峠11:25 - 14:11平標山の家

法師温泉までバスを乗り継ぐ。断続的に強い雨が降り、気分が萎えてしまう。それでも何とか三国峠に登り、縦走開始。雨はやんだがやっぱりおもしろくない。平標山の家に着くころやっと晴れてきて、まわりの紅葉が目に入ってきた。そのまま降っていたら元橋に下っちゃったかも。

9/28 平標山の家5:35 - 6:25平標山 - 7:33仙ノ倉山 - 11:18万太郎山11:36 - 12:29大障子避難小屋

朝がきた。快晴、風強し。平標山3度目の挑戦で初の登頂、午前6:25。さすが国境稜線、頂上は風がすごくていても立ってもいられない。でもこれから、笹の茂るたおやかな稜線の、見

渡す限りの大パノラマを独占していける。笹の紅葉がまたいい。なんて思ったのもつかの間、仙ノ倉の登りで風が遮られている間だけだった。下りになると本当にこりまらずいぞ、というくらい強風。毛手が欲しい。避難小屋でしばらく様子を見るか、そこで泊まっちゃうかしよう。しかし、仙ノ倉山の東側の避難小屋は、朽ちたドラム缶が横になったみたいで本当に死にそうになった時くらいじゃないと誰も使いそうにない感じ。もちろんパスする。やがて風もやみ、平和な稜線散歩で毛渡乗越、万太郎山と越えて、大障子避難小屋に着いた。水はこんこんと湧き出ている。今思うと、秋には場所によっては水が溜れていることもあるというのに、何も考えていなかった。

9/29大障子避難小屋5:50 - 8:07谷川岳8:22 - 10:18茂倉岳 - 12:11武能岳12:25 - 13:04蓬峠

またも風が強い。撤収とバックキングができるかとかいろいろな不安を覚えながら朝を迎える。高曇り。運良く今日も風は収まって、快調に行く。谷川岳ちかくで初めて登山者に会う。頂上では展望はなかった。ノゾキからは、これが一ノ倉沢かなんて思ったが疲れてきてこの辺ではきつかったことしか思い出せない。武能岳がはるか遠くに見える。ガスの武能岳の頂上で大休止の後、蓬峠へと頑張った。蓬ヒュッテのおやじさんから、「明日は白毛門行くのかい。」と聞かれた。元の予定は土樽に下るはずだったが、そう言うのも恥ずかしく、馬蹄型縦

走も加えることに決めた。谷川連峰踏破だ。

9/30 蘆峠5:35-7:08清水峠7:25-10:02朝日岳10:13-12:29白毛門12:45-14:46土合橋

霧に包まれた稜線を行く。清水峠までは案外登り下りが大きかった。朝日岳までは登り一辺倒だが、かえってリズムが崩れず、に案外楽に着いてしまう。ナナカマドやカンパ類が美しい。頂上でちょっと道を見失って、こんな時1人は恐いと感じる。笠ヶ岳までは、ガスの流れる中を細かいアップダウンが激しく、そろそろ疲れが出てきた。白毛門では、谷川岳の岩壁が真っ正面。ここまで来ると、日帰りハイキングの人もいて、疲れているみたいねと言われてしまった。白毛門沢から来たグループに沢の様子を聞いた。

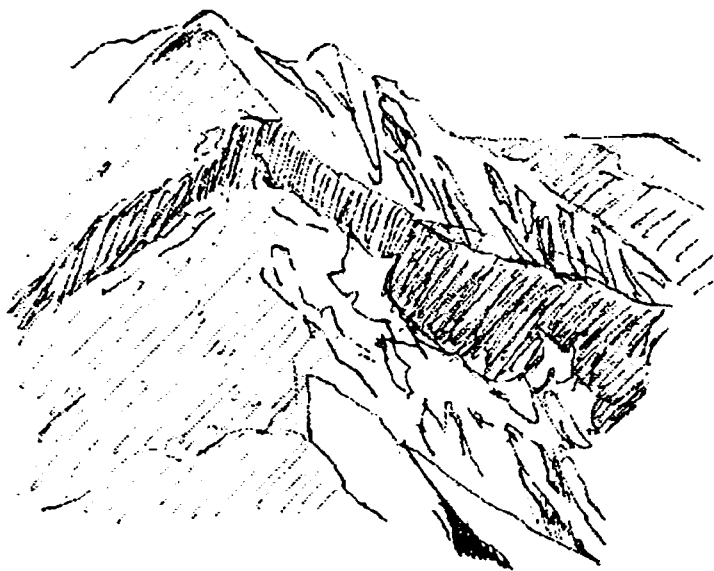
土合15時過ぎの電車にまにあってしまった。もう帰りたかった。

17時半頃西高生と西原が来た。懐かしい人に再会したようでほっとする。サブザック、ハーネス、ヘルメットを持ってきてもらった。さあ、また味の違う新しい山行が始まる。

10/1 土合橋5:15【白毛門沢溯行 7P】白毛門12:35-15:06土合橋【西高9月月例山行・沢登り】

白毛門沢溯行は高校2年の時もやった。その時は増水していたが今回は大丈夫だ。大滝のみを巻く。あとはほとんど問題なく、源頭部へ。最後のツメで山頂を少しばかりはずしてしまうが時間も予定どおりに登り終えた。雨が降ったりやんだりのはっきりしないなかを土合まで駆け下る。なんとか電車に間に合った。僕としては早く帰りたくてしようがなかったのだ。

水上で乗り換えの時ホームで解散式をした。



Illustrate by Hiroko Takahashi

9522 Area 中央アルプス Style Winter Variation

Mt. 黒覆尾根 冬山偵察・越百山 雪訓

DATE : 1995 (H7) 12/01~12/03

MEMBER : 上野・尾崎

12/2 駐車場9:25-13:25撤退14:09-15:36
中小避難小屋

初めての西朋の冬山。しかもバリエーションルートの偵察で、黒覆尾根の取り付きは変なダムを渡ったところ。なんか大変なところに来ちゃったなあという印象を覚えている。

ずっと激しいササヤブで、ところどころかすかに昔の踏みあとらしきものがある。しばらくは平坦な台地で、25000図で位置を確認してもいまいちよくわからない。やがて尾根の中腹をトラバース気味に行くようになる。

しかし、進むほどにササは密になり、背丈を越えた高さ。いったいどこで頑張っているのか、いよいよ分からなくなってしまう。これでは正月も無理だと判断した。

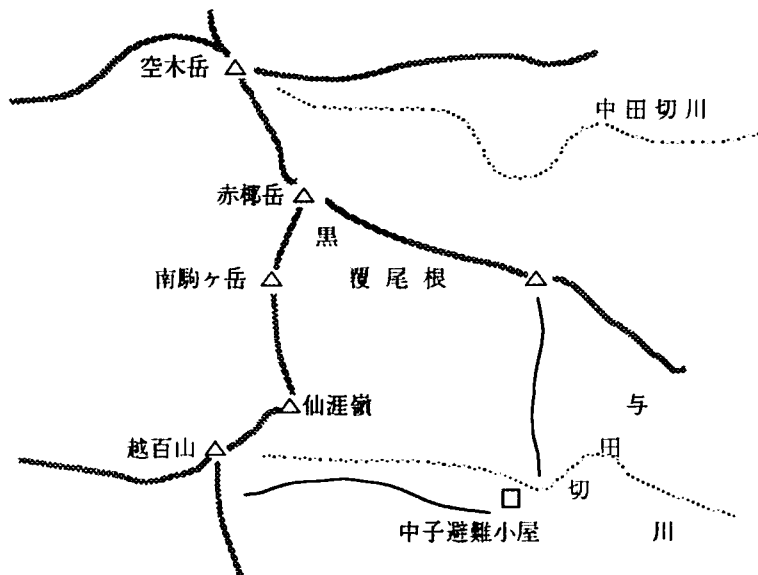
本当ならすぐに帰ったのかもしれない。でも明日、越百山方面へ行けるところまで行ってみたいと僕が言い、そうし

ていただく。中小避難小屋泊。

12/3 中小避難小屋7:50-12:00飛竜の滝から45分上流地点(引き返し) -14:28 中小避難小屋

越百山に向けて谷沿いに登った。いちめん氷の世界だ。氷瀑が快晴の空を映して青い。今(2年後)記録を書いていると、谷沿いで、もし雪崩にやられたらどうするんだって思う。確かに積雪は少なかったけれど。

その翌年の秋、大学の友達と、空木岳~越百山の縦走をした。誰もいない秋の稜線は魅力的だ。中小避難小屋への道は、稜線直下では冬は雪崩れそうな地形だった。また、引き返した地点は稜線から丸1時間も下ったところだった。あの時、稜線は近くに見えたが、本当はまだ遠くだったようだ。



9523 Area 南アルプス Style Winter Climb

Mt. 塩見岳 冬山合宿

D A T E : 1996 (H8) 01/02 ~ 01/05

MEMBER : 上野 高橋 尾崎

中ア・黒覆尾根～南駒ヶ岳は断念。冬山合宿は南ア・塩見岳、蝙蝠岳となった。

1月2日夜、上野氏の車で東京を発つ。昨年末の北岳パトレスでの雪崩遭難事故のニュースが、我々の不安と緊張を呼ぶ。

1/3 ゲート6:20-8:51塩川小屋9:00-14:55
三伏峠

夏はなんとか小さなバスが入る林道を塩川小屋へ1.5P。入山時の林道歩きは、これから山に登るんだ、と気合いを入れたり、気分を盛り上げたりするプロムナードかもしれないけれ

ど、冬山なんかでは、行く手の困難を考えて憂鬱になりがちだ。

三伏峠へは、急だったが思ったほど大変ではなかった。だがやはり、豊口山からの道を合わせた最後の30分はきつかった。おまけに雪が降り始める。「漆黒の鉄の兜」、いや、冬は「銀灰（ぎんかい）の鉄の兜」か、を望むことはできない。

1/4 三伏峠9:01-本谷山11:24-15:19塩見小屋

無風快晴！そして、今日は行程も短い。しか

Mt.Stomi 塩見小屋から三伏峠へ戻る



Mt.Sioml 塩見岳頂上にて



し、喜ぶのは早かった。昨日の雪でトレースは見事に消え、塩見小屋までひたすらラッセルとなる。甘く見て出発を遅らせたのは失敗だった。地図によると一度下って枝尾根から主稜線に登り返す。これは大変なことになりそうだ。が、なかなか下りにならない。気がつくると、右手に並行して、枝尾根が登っている。そして、どう考えても、地図ではあの尾根に道が書かれている。道を失ってはいないので、どうやら下らずにすみそうだ。森林限界を超えた。まるでヒマラヤのように雪煙を巻き上げる塩見岳に、登高欲がかきたてられる。

1/5 塩見小屋7:02-8:07塩見岳8:36-9:16塩見小屋10:14-塩川小屋16:40-17:32ゲート

今日も天気は抜群。頂上まで慎重に行く。す

ごい高さだ。ザックのストラップが風にあおられてビシビシと顔にあたる。その痛みが爽快で、いかにも冬山だ。奥深い南アルプスの山々の中で悪沢岳がひときわ立派だ。蝙蝠岳は下の方に、のっぺりとしている。やはり、下に見える山に登る(?)気はしない。

本来なら三伏峠でもう1泊の予定だった。だが、川原まで行こうと、下り始めたら予想どうり帰ることになってしまった。下山時の林道歩きは少しだったら山の思い出を振り返るのにもいいかもしれないが、夕闇迫る中、ゲートまでの1P強は決して短くない。僕はもう1泊したかったが、達成感と少しばかりの開放感を感じつつ、がんばる。鹿塩温泉は食塩泉で、いい湯だった。

9527 Area 苗場 Style Ski Tour

Mt. 神楽峰

DATE : 1996 (H8) 03/16

MEMBER : 吉田(慎)・山野・山田・上野

石打の私のマンションに集まって山スキーを楽しむもうということになった。

前日15(金)の夜、7名が集まったのは既に22時を過ぎていたのに、宴はずみ、午前3時位に就寝となってしまった。

翌朝8時過ぎに石打を出発したが、混んだリフトを乗り継いで、かぐらスキー場の第三リフトの上でシルを着けた時は丁度12時だった。前夜飲み過ぎの17期のMさん等3名に見送られて快調に登り出す。出発点は標高1500Mで、この上にもう1本中ノ芝(1700M地点)迄のリフトがあるが、これは特別な大会等の時しか動かしていないそうだ。

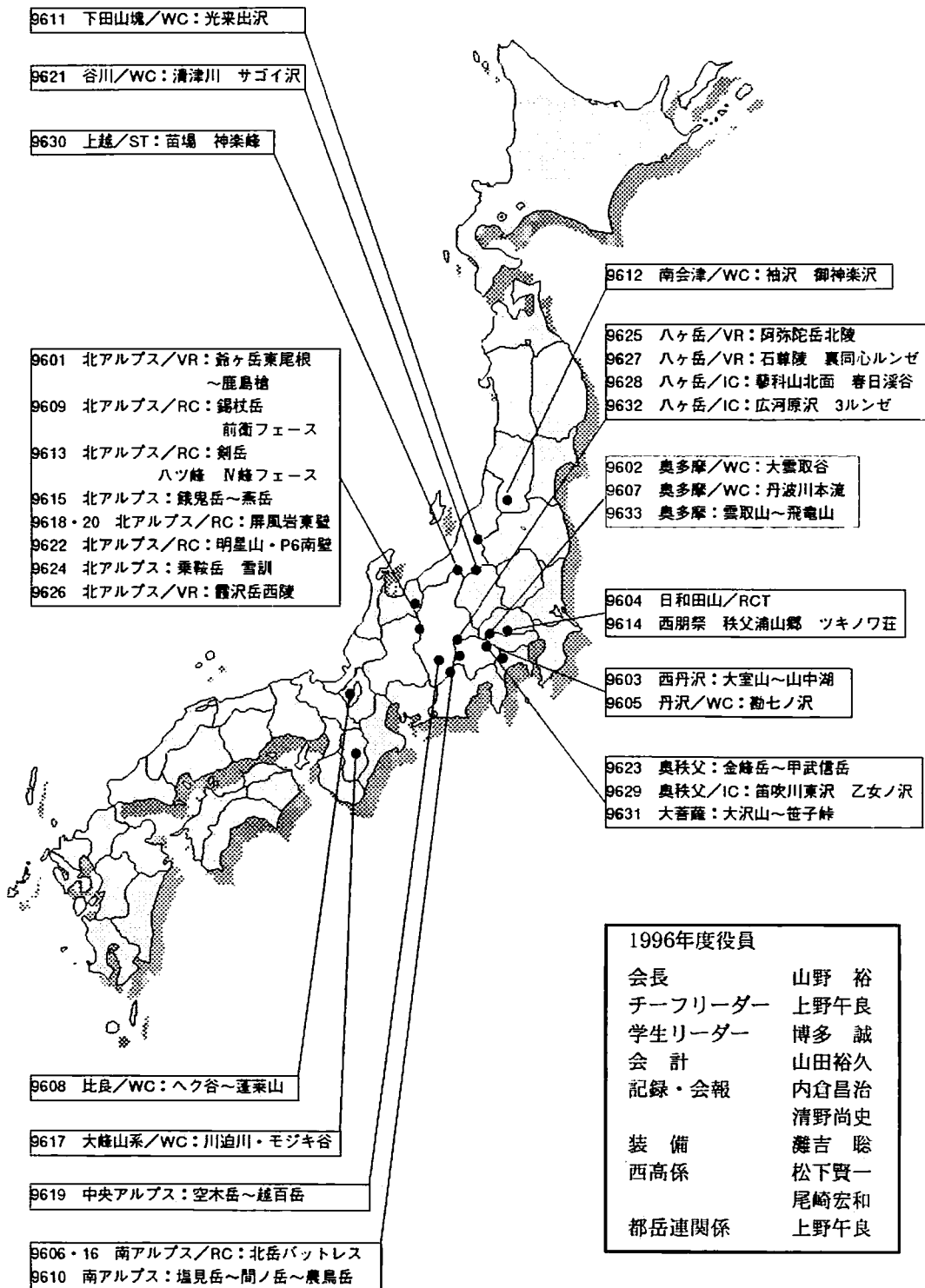
表面30~40cm程が新雪で、雪質も良く眺望にも恵まれ最高だ。途中、急登があって2、3度ジグザグを切ると中の芝に着く。中の芝の上で小休止した後、14時頃稜線み出た。稜線づたいに神楽峰の頂上に登る。苗場山や360度の雪景色をたっぷり楽しんだ後、シルを着けたまま中尾根の頭まで下りてゆく。ここでシルをはずして、さあいよいよ和田小屋迄、標高差700Mの滑降だ。中尾根の雪庇を避けて夏道との間の谷を滑ることになった。処女雪の斜面に思い思いのシュプールを描き、時々雪まみれになって和田小屋に着いたのは16時だった。最高でした！

(吉田(慎) 記)

Mt.Kagura 駐車場にて



山行記録



1996年度 (平成8年度)

● 9601 Area 北アルプス Style Spring Variation

Mt. 爺ヶ岳東尾根～鹿島槍ヶ岳

DATE : 1996 (H8) 05/02～05/04

MEMBER : 博多・尾崎・西原・灘吉

雪の北アルプス。山をやる誰もが憧れるものの1つではないだろうか。僕らもバリエーション入門ルート、爺ヶ岳東尾根から鹿島槍ヶ岳をめざすことにした。

5/2～3 新宿23:54＝信濃大町5:31＝鹿島山荘6:13～10:41 1978m付近 [雪訓]

登山者でごった返す新宿駅5番線ホーム。上野くんらに見送ってもらい、急行「アルプス」に西原、灘吉、尾崎の3人で乗る。博多氏とは松本で合流の予定。同じボックスに座ったおや

じは、山へいけるとハッスルしているらしく、いつまでも自分の昔語りが絶えない。いいかげん静かにしてくれよ。

白銀の峰々が僕らを待っていた。降り立った信濃大町駅ホームからはめざす鹿島槍が！登山口で団体装を振り分ける。他パーティも多い。1P目はかなりの急登で、「どうぞ先に行ってください。」が連発し、まだ動き始めたばかりの体には厳しかった。

主稜線が僕らを圧倒する。いつのまにかに距離を稼いでいるのでレストもとりまくる。幕営地にはずいぶん早く着いてしまった。頑丈な防

Mt.Jii 爺ヶ岳頂上にて



風ブロックを建設した。スノースコとスノーソーが存分に威力を発揮してくれた。

これから、今回の主要目的の1つの雪訓だ。テントでのんびり、ではない。ザイルワークを主に、陽が傾くまでしっかりやった。そうしているうちに、博多氏の友人の藤田氏がやってきた。

藤田氏もいっしょに、テントでちょっと夜更ししてしまう。

5/4～5 幕营地5:20-7:20 爺ヶ岳7:41-
8:34 冷池9:00-10:30 鹿島槍ヶ岳11:00-
15:48 幕营地16:45 -18:52 鹿
島=19:40 信濃大町20:37=松本0:20=

天気は今日いっぱいもちそう。晴れているものの、天候悪化を知らせる紺雲がたなびいている。今日中に何とか下山することを考え、アタックにした。僕自身はどうにかしてもう1泊したい気もしたが、まあしょうがない。

ナイフリッジの尾根に行く。急登になるとやがて白沢天狗尾根と合わさり、大雪面を登る。下りの時はまちがえないように赤旗を立てておく。すかさず、「この赤旗は短すぎるよ。」と、博多氏の厳しい指摘。確かに、この長さでは遠くから目立たない。急な広い尾根を登りつめ、爺ヶ岳中央峰にやっと着いた。この登りはきつかった。

ほとんど夏道



が出ている稜線を鹿島槍ヶ岳へ。アイゼンの刃、砥いだばかりなのに減ってしまうなあ。信州側は大きな雪庇ができています。鹿島槍南峰から北峰を見下ろす。本来は行く予定だったが、下に見えて行く気がなくなったし、時間のこともあって中止。

爺ヶ岳中央峰からの大雪面の下りは、藤田氏といっしょにグリセードをやってみる。オレンジ色の斜光が山ひだを浮かび上がらせ、アルペンムードだ。

一歩一歩麓が近づく。最後の急下降で薄暗くなり、鹿島に降りついた時は真っ暗になった。帰りの列車は夜行になってしまう。気がつくとも甲府。

午前2:30、雨。すでに朝となっている吉祥寺からはどしゃ降り、覚悟を決めて歩いた。

9608 Area 比良 Style Water Climb

Mt. ヘク谷～蓬莱山

DATE : 1996 (H8) 07/21

MEMBER : 西原直 (47期) 他2名

比良山系は琵琶湖の西岸に位置し、標高1214mの武奈ヶ岳を中心に南北へ連なっている。高さだけならJR最高地点の駅、野辺山駅の1344mにも達していない(笑)が、湖国の空を圧して堂々と立ち並ぶ威容は、小さいながらもアルプス的な風貌を持っている。(とエアリアに書いてある。言い過ぎだろう)僕にとっての比良は、沢登りのゲレンデ、トレーニング場所である。券囲氣的には、丹沢をやや小さくした感じだろうか。裏比良と呼ばれる西側斜面には、難易さまざまの沢が走っており、どれも日帰り行程なため、京都府、滋賀県からはもちろん、大阪府などからも人が集まっているようである。

出町柳7時45分発のいつものバスに乗って出発。下坂下で降りる。わずか1時間余りである。安曇川対岸にV字状に切れ込む谷がヘク谷で、出合は小川のような細流で少々分かりづらい。少し進んだあたりから小滝がかかり出す。記憶に残っていないくらい楽な滝なはず。小滝群をやり過すと、二条の滝(8m)をシャワークライミング。ヘク谷は全体的に水飛沫を浴びるところが多く、いつ行っても寒い印象がある。続いて二条12m。左側から取り付き、シャワーを浴びて直上、上で詰まるので右に移って越える。(とガイドにある)確かにこの時はそうした。でも昨年行ったときひどく苦労したのは、どうやら右から行こうとしたからか?まあ、ルートを誤ると大変!ということで先に進もう。二段(15~20m)の滝が行く

手をふさぐ。巻き道もあるようだが、すぐ右を直上。出だしのホールドがやや細かいくらいであとは階段状、どこからでも登れる。(沢ヤの階段状は一概に信用できない?)一段目を登り右に寄ってブッシュでランニングビレー。二段目上部のブッシュで終了。昨年、近くの岩場で不覚にも残置とともにグランドフォールした僕にとって、信じるものはブッシュである。結構高度感は得られるのでぜひ登っておきたい。次の18mの滝が大滝と呼ばれているものだが、直登は無理らしいので僕らも巻き道をたどることにする。このあたりで大坂わらじの人が笛を吹いて下降路を教えてくれたが、僕らは稜線を目指すことにした。

この先はブッシュも多くなり、水も次第に消え、沢登りの魅力は微塵もない。(というトマニアックな人には怒られるかもしれないが)疲れきっている体に潤れ果てたガラガラした岩場はこたえる。かすかな踏み跡を求めてササ藪の中を行くと、小女郎池に飛び出した。やや右に寄り過ぎたせい、沼地を行進する羽目になったのをよく覚えている。それでも小女郎池は開放感あるいいところで、時間さえあればゆっくり昼寝でもしたいところである。ザイル操作に手間取っていたせい、17時くらいだろうか、だいぶ日が落ちていた。沢道具を片付け、ここから一時間半くらいのJR蓬莱駅を目指し駆け下ることになった。

9608 Area 南会津 Style Water Climb

Mt. 袖沢 御神楽沢～会津駒ヶ岳

DATE : 1996 (H8) 08/15～08/18

MEMBER : 上野・額賀・高橋・尾崎・西原・灘吉

8/15

前夜より駅寝する者、新幹線で滑り込む者、各自でんでバラバラで早朝の上越線浦左駅に集まる。寝惚けた集団と対照的にただ一つハッキリしている事実があるとすれば、今にも雨が降り出しそうだということである。テレテレと客のいないカビクサイバスに乗り込みシルバーラインをカッ飛ばす。バスを放り出されるとそこは夢の国？奥只見ダム。雨が激しく降っているのは、もはやお約束。便所で雨宿りするが止む気配がまるでないのであきらめて雨ガッパで歩き出す。土産物屋の前を通り過ぎ、河床を遥か下へのぞき込む。バスが今来た道を少し戻ると本流河床へ下る道があるはずなのだが、なかなか

見つからない。ペンションで道を聞き、ようやく入り口を見つける。そのペンションのちょうど裏手に電力会社の管理小屋付の立派なゲートがあった。管理人に愛想良く見送られ林道をダム方面の河床に向かって下っていく。大型工作機械を何台か見やり、本流を橋で渡って対岸へ。大きくUターンしてダムと反対の方へ向かう。ここまで来るとやっと山の中っぽくなる。と思ったらおいでなすった、メジロ様。防虫ネット越しでも余裕でお囃みになる。相変わらず強弱付けて降り続く雨は、メジロ様と相まってウツウシサ300%。もう好きにしてくれ。林道2Pほどでトンネルが現われる。もういやになってテント張っちゃう。もう一歩も歩きた

Mt. Atzukoma 御神楽沢の岩壁を飛び越えてみる



Mt.Aizukoma 御神楽沢のゴルジュ帯を行く



くないやい。更に雨足は強くなり、ジメジメしたトンネル内は不快指数500%。もういい、もう寝る。

8/16

起きたけど雨。見なかったことにして、も一回寝る。少し待ってだいぶ雨足が弱まってきたのでダルイけどそうも言っていないのでチンタラ歩き出す。するとやっぱりやって来るみんなの愛苦しいアイドル、メジロ様。その可憐な御口で嘯みたい放題。かわいいやつ。好きにして2。

林道終点の取水口に着くころには誰かイッチャッター人も出るんじゃないかと思っていたが全員普通だった。雨とメジロですっかりイヤになっていたが、沢を見ると思わず笑みがこぼれ、口元が緩んでヨダレが垂れてしまう。垂れたヨダレはすぐさま沢に混じり解け合い、悠久の時を経てこの沢の水を使っている都市に供給される。そんな水に金はらってんだよ、みんな

な。

早速沢に入る準備をする。ハーネスを着けると気分も引き締まる。もちろん口元も引き締まるのでヨダレをすすり上げる。

さあ、時は来た。もはやためらうこともあるまい。沢靴履いて、Let's Go!

冷たく固い水はまだ少し増水気味のようでも重たい。ここんどこ雨が多いから。思ったよりスケールの小さい沢だが、水量が多い。水圧が高く足をとられるので徒渉には気を使う。右に左に沢を渡り先に進む。滝は無く沢歩きのみ。個人的には滝登りより沢歩きの方が良い。天気がイマイチなのと出た時間が遅かったこともあり、今日はミチギノ沢出会の二俣に張る。

雨の中、懸命にたき火を起すがイマイチ良く燃えない。さむ〜。もういい、もう寝る。

8/17

起きるととりあえず雨は上がっていた。水量が

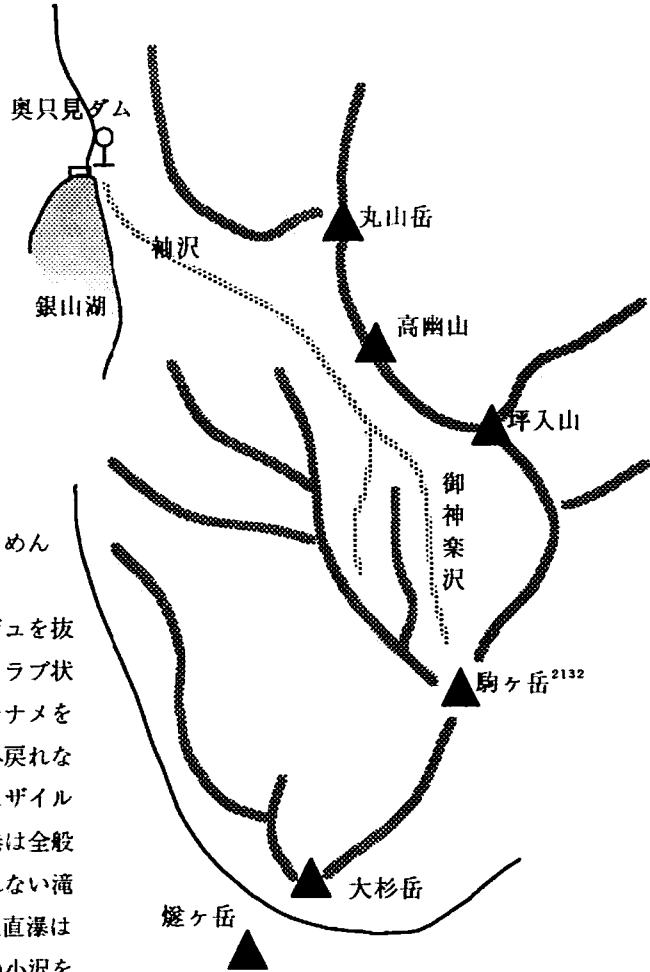
昨日と比べ減っている。天気はやっと回復したようだ。出発時、いきなり釣人と出会った。お互いヒキツツ挨拶。これから先は釣れまい、と思ったらやはり名様御帰りのようだ。気分も上々で歩き出す。天気も上々で青空が高い。

程なく今回一番の目玉？岩畳地帯にたどり着く。飛び越えて遊ぶ。良くぞ御創りになった！これはパパチョップで割ったに違いない！流しそうめんか何かやったら楽しそう？

さしたる滝もなく進み、楽しい小ゴルジュを抜けると最大の難関とやらの滝に到着。スラブ状の大滝で、落口付近までは右手側の急なナメをつめることができるが、そこから本流へ戻れない。しかたなくそのさらに上の泥垂壁にザイルを延ばし、無理矢理草掴みで超える。巻は全般草付きのいやらしい泥壁で、しかも登れない滝が以外と多い。困ったものだ。途中10m直瀑は右の尾根より超える。（ガイド通り左の小沢をつめるより楽）やがて雪渓が断続的に2、3ヶ所現れる。コワゴワ上を渡る。何故かこういう時、最悪な事態を考えながら歩いてしまう。なむなむ。もうだいぶ上流の雰囲気だ。わらび糸もたくさん生えている。ほんとうに滑っている電光形滝を超えるといい時間になっていた。1750mの二俣とおぼしき所にテントを張る頃にはもう薄暗くなっていた。たき火も出来ずに寝る。今回は今いちさえないなあ。

8/18

今日もいい天気だ。歩き出してほどなく水流が細くなる。源頭の様相はやがて猛烈な笹藪帯へと吸い込まれていった。その先に主稜線が望ま



れる。やだな～と思いつつ笹藪へ突入。漕いで、漕いで、漕いで。びし、もういい。視界が開けると稜線直下の草原地帯。やれやれという感じで木道へ上がる。

会津駒の頂上はすぐに着いた。が、前に5月にきた時と違ってなんとも野暮ったい感じだった。こんなものかと思い、人でごった返す肩の小屋へと下る。そこで皆あまったソーメンを食った。下山は登山道をひたすら下り、檜枝岐へ到着。しばらく来ないうちに何とも立派になってというか、何と言うか状態と化してる。近くの公衆浴場で汗と香りを落として無事、人間として帰路についた。

(高橋 記)

9617 Area 大峰山系 Style Water Climb

Mt. 川迫川 モジキ谷

DATE : 1996 (H8) 09/07~09/08

MEMBER : 西原直 [47期] 他4名

大峰山系は皆さんご存知でしょうか？紀伊半島の真ん中、近畿の最高峰である八経ヶ岳を頂点に北は吉野山から南は熊野へ達する雄大な山脈です。また、その一角である山上ヶ岳は、いまなお女人禁制を守り続けていることでも有名です。[ちかくその長い歴史に終止符が打たれるとか]

ここ大峰山脈には、あの池郷川を筆頭に水量豊かな沢が無数に存在します。今回計画したのは、九月ということもあってその中でも泳ぎの無い沢です。

京都と奈良、近いように思えるが殊に大峰山脈となると半日かかる。京都朝一の電車で行くがバス、タクシーを乗り継いで、廻行開始は11時ごろ。はじめはやはり水量豊富でちょっとだけ本流廻行の気分。しっかりした巻き道があるので楽にかせげる。3時間ほど歩いて[本当に沢歩きといった感じ]バリゴヤ谷出合。更に問題なく歩いて大滝手前100mくらいの台地を今日の寝床とする。ここいらは伏流。廻行図には「格好の台地あり」と書いてあるがどうやら行き過ぎたらしい。少しナナメっているが気にしないことにする。テン場が決まったら即、薪拾い。やることをやってからゆっくりするのが僕のモットー。今日はパーベキュー。それ用の網まで持ってきている。直火焼きにビール。

沢とどっちがメインだか分からない。たいそうご機嫌になって寝る。どうやらこの夜、連れは飲み過ぎてもどしたらしい。

次の日のんびりと撤収してから稲村ヶ岳を目指す。大滝を巻くための支沢の大岩の乗っこしに苦勞した。

それを越えると流れも小さくなる。12m、10mの滝もたやすく越える。源頭付近の二股でちょっと休む。

「まああと1時間かからないね」僕の発言。案の定、誰も信用してくれない。さて問題はここから。

「関西周辺の沢」によると左のルンゼからだ頂上に直上できそう。右側だと石楠花尾根にいったん出ることになる。直上した方が気持ちよさそうに思ったのでルートを取る。左に寄ったところ、たちまちルートが不明瞭になるが、テープなどの道しるべがあったのでそのまま突き進むと小岩壁がたちはだかった。ガンと思ったけど今更あの傾斜のある草付きを下るのも恐ろしい。

シュリングで確保しながら越える。次に出てきたのは、やっかいそうなチムニー。おいおい、である。

こんなところでフリークライミング？なんて思いながら、一回落ちる。こんなところじゃ救助隊も大変だろうに、なんて言えるのは今だから。もう一度気合を入れて泥臭く上ると、視界が開け、どうやら稲村ヶ岳の西側にのびている尾根の上部に出たらしい。こんなところにテープつけんなよ、とテープあるから行けるはず、が頭を駆け巡る。残りの二人を違うところから誘導してひとまず小休止。

そのかん少し偵察に行く。またもやガンと

立派な岩壁。これは終わったか [Game Overってやつだ]

と一瞬だけ思う。が、2機目が残っているわけではない。ルートを探す。すると、左の方から巻き気味に行くことで活路が見出せそう。ブッシュの中をやや下り気味に進み、そのあとあえぎ登るとすんなり踏み跡に出た。そして、尾根の右手からは目指すべきルンゼが上がってきてるではないか。

「どうやら、はやまって左に入ったのが間違いだったみたいだね、あはははは」なんて言って

みる。

本来、冷たい目で見られるところだがどうやら事情が違うみたい。みんな真剣な顔で生きて帰れることの喜びをかみしめてた。天気も下り坂で、稲村ヶ岳は展望も何も無かったがみんな笑いが止まらなかった。

最近手に入ったのだが、京大ワンゲル部の記録にも「左によるとイヤラシイ岩壁が出てきた」とあった。



Illustrate by Hiroko Takahashi

9621 Area 谷川 Style Water Climb

Mt. 清津川 サゴイ沢

DATE : 1996 (H8) 10/12~10/13

MEMBER : 吉田(慎)・山野・渡辺(喜)・上野

昨秋、巻機山の米子沢がとてすばらしかったので、今秋もまた中年組で沢登りをする事になった。かねてより紅葉の頃、谷からの苗場山をやってみたかったので皆に話した所、賛成してくれたのでサゴイ沢と決まった。例のおり前夜11日(金)に石打のマジョンに集合し、ワインと山の話で盛り上がり、何時に寝たのか覚えがない。

12日(土)、今日は赤湯までの2~3時間の紅葉見物なので寝不足も気にならない。遅い朝食を食べ、おにぎりを持って、昼過ぎに石打を出発する。赤湯までの道は峠を一つ越えて、けっこう汗をかく登り下りだが、天気も良く谷の紅葉は丁度見頃だ。赤湯の露天風呂をあちこち梯子して、持ってきた白ワインに鯛の昆布メで楽しい夜だった。

13日(日)、夕方4時頃までには赤湯に帰り着く予定で、朝6時に出発するが、これがあまかった。冷たい渡渉を2、3度繰り返し、7時過ぎに五重の滝に着く。左岸を小さく巻いて熊の沢との二股で一服する。8mの滝は左岸を、続くゴルジュは右岸から巻くが、廻りの形跡は少なく、この沢は最近あまり人が入っていないらしい。予想以上に時間をくう。途中立派な釜を持った10m程の滝は左右の巻きも悪そうで、大高巻きになれば時間も体力もくいそうなので、ずぶぬれを覚悟して真ん中から挑戦する。釜を泳ぐように渡渉して、滝を浴びれば冷たいが、以外と楽に登れた。皆もあきらめずぶぬ

れとなる。気を取り直して2、3の滝を越えてゆく。1カ所懸垂下降してゴルジュを越え、最後の15mの滝を左岸から巻いて核心部を終える。

二股の手前でかまを眺めながら昼食をとるが、既に14時近くになっていた。詰めの藪漕ぎは結構きつく、最後の溶岩壁の藪は急で、腕が疲れる。15時に稜線に出たが、湿原をたどって山頂に着いたのは16時半。もう、さうとう疲れていた。上野君が先回りして作ってくれた温かい味噌汁を飲んで元気を取り戻し昌次新道を下る。真っ暗闇のブナ林をすべりながら下って、赤湯に着いたのは20時近かった。山口館の主人はさうとう心配していた様で申し訳なかった。ふらふらで駐車場に着いたのは23時近く、東京へ帰る新幹線ももうなく、石打にもう一泊することになった。朝から17時間はさすがに疲れたが、充実した山行でした。

山野会長がほつり一言「この計画を立てたのは誰だ!」。どうもすみませんでした。また、渡辺(喜)君の元気さと、上野君のお世話に深く感謝致します。それにしても白山書房のガドブックはコストがきつ過ぎる。

(吉田(慎) 記)

[追記]

まだ若いと思っていた自分でさえ、疲労困憊した沢登りでした。決してベ-スは遅くはなく、いかんせん、なにしろ沢が長かった。疲労

した体に鞭打って暗闇の中の下山は誰しも無口になるものだが、そこには会話があった。

さすがWV部での「昔とった杵柄」よろしく、大先輩3氏の体力と精神力には頭が下がりました。 (上野 記)

9626 Area 北アルプス Style Winter Variation Mt. 霞沢岳西陵

DATE : 1996 (H8) 12/28~12/30

MEMBER : 加藤・上野・高橋・尾崎・西原・灘吉

Mt. Kasumizawa 霞沢岳より天場へ戻る

12/28

夜行で入り、タクシーで上高地前の温泉へ。入り口のトンネルは車と人でごった返している。雪も舞って、いまいちさえない。早くも温泉入って帰りたい気分。もくもく歩く他人、スキーを使う他人、ソリを引く他人。人波に流されながら上高地へ向かう林道をひたすら歩く。カラマツとシラカンバの織り成す冬化粧が何とも言えず美しい。途中に安全対策小屋？があり、中で暖かいお茶とお新香が出た。むさぼりんぐ。登山届けを出して現状を聞く。ここ数日の霞沢への入山は無いようだ。意気揚々と、でもお名残惜しく暖かい小屋を後にした。長い別世界系のトンネルを抜けるとそこは雪国だった。抜けなくても雪国だけど。トンネルは入口と出口にゴム状の重い垂れ幕というか、のれん？がかかっており、変な感じだ。床は所々湧水があり、薄く凍っていて滑って怖い。やがて尾根の取り付き地点に着く。



93 94 95 96

先行トレースは良く見るとうっすらと見えるが基本的には無いに等しい。早速ラッセル開始。さしたる難所も無くすね位のラッセルを続けて順調に高度を稼ぐ。だいぶ背丈の低くなってきた上部の樹林帯で幕営。

12/29

天気上々。最初のピッチで樹林を抜けると穂高の大パノラマ。途中尾根がナイフ状になり、2級ぐらいの岩場があるが問題無し。あっという間にのっぺり広い霞沢岳頂上へ。たっぷり景色を堪能する。ところで折れた3本槍とはどの部分だろうか？楽しく歩いて天場へ戻る。今日中に下山できそうだが塩見でのことがあるので今日はもう一泊することにした。(うちわネタ)

12/30

今日もいい天気だ。眼下に大正池を見下ろしながらチンタラ下山。何とも楽な合宿である。途中3パーティ程スレ違う。林道に降り立ち、あとは温泉めがけて歩くだけ。今回はちょっと楽すぎでした。でもタマにはいいかも。

(高橋 記)

Mt. Kasumizawa 霞沢岳頂上にて



● 9631 Area 大菩薩 Style Climb

Mt. 大沢山～笹子峠

DATE : 1997 (H9) 03/23

MEMBER : 尾崎 他1名

3/23 笹子 8:39-9:30 「213・214号に至る」
-11:06 大沢山-13:44 1411m 峰-15:08 笹子
峠-17:01 笹子

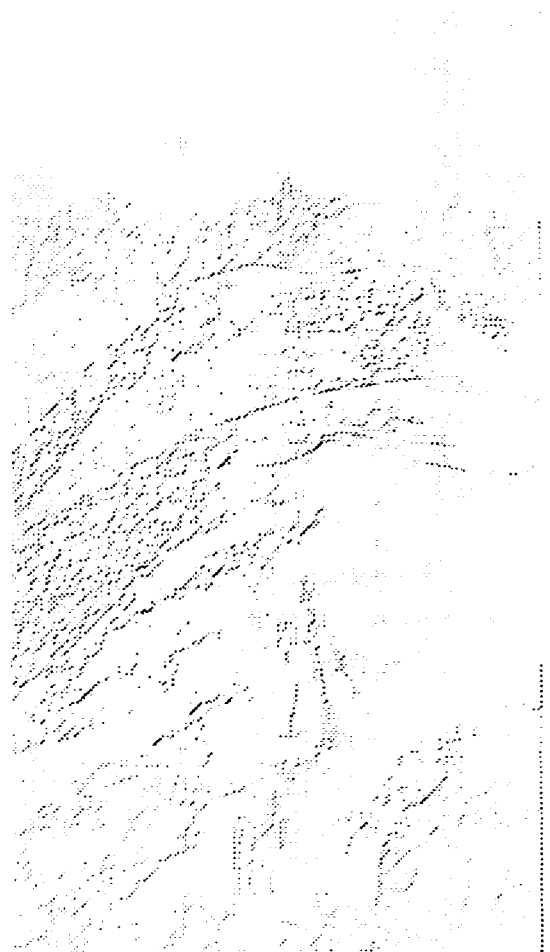
近場でおもしろそうなところを見つけた。大沢山なんて、地図にも載っていない。中央本線 笹子駅下車。笹子鉱泉のところから三ツ峠方面への道に入る。雪が降り始めた。標柱「213、214号に至る」から山道に入る。送電線の巡視路から登り始めるというのが実にルーファイチックだ。

すぐに道は2つに分かれ、左へ入った。大沢山は左上方だからだ。でもこの選択が安易だった。踏み跡の不明瞭な小尾根を、とにかく上へ行けばいいんだ、と登っていく。左下には、へんな宇宙基地みたいなものが。「あれこそ本当のオウムの司令基地か!?!」尾根上のしっかりした道に出て、大沢山に着いた。

ここからいよいよルーファイ本番となる。木々はすっかり雪化粧し、ルートも雪に隠れている。下る方向を確認する。所々岩の出た道を急下降して、ボッコの頭へ。右折した後の次の1355mピークで一瞬道を失う。東側からまいて左折だった。1403m峰、1411m峰と進む。1411m峰からは、ほとんど来た方向へ戻るように下る。だが、どうも曲がる感じが無い。磁石で正しいことを確認。意外にも、ここから笹子峠までが曲者だった。各ピークごとにまちがい尾根を判断し、下る尾根を決めた。左、右、左、左、左、右、左、と進路を見極めて笹子峠へ着く。少し緊張がほぐれる。

あとは旧甲州街道を笹子駅へのんびりと何も考えずに行けばいい。

帰ってからわかったのだが、あの「へんな宇宙基地」の正体は送電線の変電所だった。また、雪が降っていたからこそおもしろいルーファイ山行にはなったのかもしれない。



● 人間の「自然保護」という思い上がり

人間の「自然保護」という思い上がり

大学4年になった。僕は今、東京農工大で環境科学を学んでいる。そして、だからこそ、日頃から、環境に配慮した生活をするよう心がけている。

それは、山へ行っても基本的に同じだ。ところが、ちょっとシビアな山の場合、自然は必ず敵になる。われらの生存を脅かす存在にすらなる。西高時代の春山合宿、1月の平標山、そしてこの間の谷川～巻機の1人縦走をした時、御神楽沢に行った時、いつも自然は敵だった。大自然はほんとうに怖いものと思った。

もちろん、僕らだってそれほどの体験をしたわけでもない。たかがラッセル、吹雪、ヤブコギ。高巻きとか、早川尾根で、滑落してザイルで止まったとか、そんなものだ。でもその時、必死だったことは一生忘れまい。間違えば命を落とす。だから、素手の人間の弱さ、非力さを知っていると思う、いや、そう断言できる。

現代人は自然の怖さを本当に知っているのだろうか？

太陽系第3惑星が、46億年目に危機に陥っている——我々人間の行いによって。そのことによく気がつき、「自然保護」には総論賛成の世の中だ。けれど、「環境との調和」の根本は自然への畏敬の念や自然の恵みへの感謝の気持ちがあるのではないだろうか。山は、人間が忘れてしまった大切なことを教えてくれた。

それから、登山とは大いなる自然破壊だという考え方があことは多くの方がご存知だろ

う。この考え方は、表面上だけをとらえての意見だと思うけれど、確かに一理あるのだ。このようなことを言われぬような山の登り方を追求したい。

(尾崎 記)

1993年度 都立西高WV部活報告

山行名	期 日	場 所	O B
新人歓迎山行	4/24~25	奥多摩・川苔山	笠原・松原・緒方 松下・野村
5月山行	5/22~23	奥秩父・両神山	内田・松下
6月山行	6/26~27	奥多摩・雲取山	緒方・内田
夏山合宿	7/22~27	北ア・後立山連峰	博多・松下
沢登り	9/11~12	上越・白毛門沢	緒方・博多
11月山行	11/13~14	北八ッ・天狗岳	清野
スキー合宿	12/25~29	妙高・池ノ平	青山・松下
1月山行	1/29~30	上越国境・平標山	清野
2月山行	2/26~27	奥秩父・瑞牆山	緒方
春山合宿	3/26~31	南ア・早川尾根~仙丈岳	内田・博多

1994年度 都立西高WV部活報告

山行名	期 日	場 所	O B
新人歓迎山行	4/24	奥多摩・三頭山	林・緒方・清野
5月山行	6/4~5	奥多摩・七ッ石	栗原
6月山行	6/25~26	丹沢・丹沢山	緒方・野村
夏山合宿	7/23~29	北ア・薬師~黒部五郎~槍ヶ岳	博多・松下
沢登り	9/14~15	四十八瀬川・勘七ノ沢	内田・博多
11月山行	11/11~13	尾瀬・焼ヶ岳	緒方・内田
スキー合宿	12/27~31	信越・アサマ2000	江川・佐々木
1月山行	1/28~29	日光・男体山	博多
2月山行	2/25~26	奥秩父・金峰山	緒方・清野
春山合宿	3/25~31	北八ッ・硫黄岳	博多・土田・佐々木・木村

● 1995年度 都立西高WV部活報告

山行名	期 日	場 所	O B
新人歓迎山行	4/23	奥多摩・川苔山	山野・野村・尾崎
5月山行	5/27～28	奥秩父・両神山	菊地・土田
6月山行	6/24～25	奥多摩・雲取山	松下・後藤
夏山合宿	7/23～28	北ア・鳥帽子岳～三俣蓮華岳 ～双六岳	木村・尾崎
沢登り	9/30～10/1	上越国境・白毛門沢	尾崎・西原
11月山行	11/24～26	尾瀬・燧ヶ岳	佐藤先生・土田
スキー合宿	12/26～30	越後湯沢・岩原	松下・野村
1月山行	1/27～28	日光・奥白根山	清野・尾崎
2月山行	2/23～25	北八ヶ岳・天狗岳	博多・尾崎
春山合宿	3/26～4/1	南ア・光岳	尾崎・灘吉

● 1996年度 都立西高WV部活報告

山行名	期 日	場 所	O B
新人歓迎山行	4/21	奥多摩・三頭山	尾崎・灘吉
5月山行	5/25～26	大菩薩嶺・小金沢嶺	尾崎・灘吉
6月山行	6/22～23	丹沢・塔ノ沢～桧洞丸	菊地・上村
夏山合宿	7/20～26	後立山連峰・白馬～爺	尾崎・上野
春山偵察	8/15～19	早川尾根～鳳凰三山	木村
9月山行	9/28～29	奥多摩・鷹ノ巣谷	土田・尾崎・灘吉
11月山行	11/23～24	那須・茶臼～三本槍	尾崎・灘吉
スキー合宿	12/26～30	万座温泉スキー場	菊地・土田
1月山行	1/25～26	八ヶ岳・編笠山～西岳	尾崎・灘吉
2月山行	2/22～23	奥秩父・金峰山 瑞牆山	高橋・尾崎
春山合宿	3/25～30	八ヶ岳・硫黄～北横岳	上野・灘吉

● 西朋登高会会則

第1章 名称・目的

第1条 本会は「西朋登高会」と称する。

第2条 本会はスポーツ精神を遵守し、会員相互の登山活動を協力して実戦すると共に、西高ワンダーフォーゲル部の指導にあたる。

第3条 本会の事務局は、毎年、総会において定める。

第2章 組織・会員

第4条 本会の会員は、西高ワンダーフォーゲル部に在籍したもの、または有志で、総会で承認を受けたものにより構成する。

第5条 本会は次の役員をおく。

1. 会長……………会を代表し、事務局をおく。
2. チーフリーダー……………山行全体を掌握する。
3. 署上リーダー……………掌生を中心とした山行を掌握する。
4. 会計……………財政を管理する。
5. 装備……………共同装備を管理する。
6. 記録……………山行記録をまとめ、会報および西朋通信を発行する。
7. 西高係……………西高ワンダーフォーゲル部を指導する。

第6条 前条の役員のうち、会長は総会にて選出し、他の役員は会長が指名する。

第7条 本会は4月に、会長が召集して総会を開く。

第8条 総会では、次のことを議事とする。

1. 前年度活動報告
2. 前年度会計報告
3. 新年度役員選出
4. 新年度活動計画
5. 新年度予算案
6. 新会員承認
7. 会の運営に必要な事項

第9条 本会は原則として毎月1会、チーフリーダーが召集して例会を開く。

第10条 例会では、次のことを議事とする。

1. 山行報告
2. 山行計画
3. 会の運営に必要な事項

第11条 本会は年1回、会員相互の親睦を図るため、西朋祭を行う。

第12条 本会には次の会員を置く。

1. 特別会員…西高ワンダーフォーゲル部の顧問を勤め、本会に大いに言献した先生。
2. 一般会員…会の活動に関心を持ち、合宿山行や、総会例会西朋祭などに参加

する会員。(会報、西朋通信などを事務局より送付する)

3. OB会員…現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加でき得る会員。(総会などの連絡のみ事務局より送付する)

第13条 前条のOB会員について、次の場合一般会員より移行する。

1. 本人の希望による。
2. 5年以上連絡がない人は、総会での協議により、OB会員とする。後に本人の希望により、一般会員に戻ることができる。

第3章 会費・会計

第14条 本会の運営のため、次のとおり会費を徴収する。

1. 一般会員…年額4000円
2. OB会員…年額1000円(数年分前納できる)

第15条 一般会員のうち、合宿山行などに積極的に参加する会員からは、装備費を別途徴収する。

第16条 会計年度は、4月から翌年3月までとする。

第17条 会計は、普通会計と特別会計に分ける。

第18条 普通会計は、会費収入をあて、装備・会報発行・通信事務などに使う。

第19条 特別会計は、西高ワンダーフォーゲル部指導謝礼金および会費収入よりの積立金および寄付金をあて、避難対策基金とする。

第4章 山行

第20条 本会は、次の合宿山行を持つ。

1. 新人合宿
2. 夏山合宿
3. 冬山合宿

第21条 会員は合宿山行の他に、各人の目的に応じて、個人山行を行う。

第22条 山行に前もって、計画をチーフリーダーに知らせる。

第23条 山行計画には、次のことを明記する。

1. 行程
2. 同行者
3. 最終下山予定日
4. 緊急連絡先
5. その他

第24条 山行後、山行報告を記録係に提出する。

第5章 西高ワンダーフォーゲル部の指導

第25条 本会は、西高ワンダーフォーゲル部が安全かつ意欲的な活動を実践できるよう、

部の顧問教諭と協力して指導にあたる。

第26条 西高係は、顧問教諭およびワンダフォーゲル部員と密接な連絡をとる。

第6章 装備

第27条 本会は共同装備を持ち、会員はこれを利用できる。

第28条 装備係は共同装備を管理する。

第29条 個人装備は各個人が負担する。

第7章 遭難対策

第30条 会員が遭難したときには、一致協力して救助に努力する。

第31条 積極的に山行している会員は、山岳保険に加入する。

第32条 山岳保険金の使途に関する権限は、本会が有する。

第33条 遭難が起きたときには、会に遭難対策本部を設直し、会長は必要な係を任命する。

第34条 遭難救助に要した経費は、山岳保険金をあて、不足分は当事者が負担する。

第35条 会の遭難救助基金は、当座必要な費用の立替に使う。

第8章 会則の修正・改正

第36条 この会則の修正や改正は、総会で議決する。

第9章 施行

第37条 この会則は、1986年8月30日の臨時総会で決定し、9月1日より施行する。

See You Again , SEIHOU 27 !



Spring Variation Climbing at Mt. Kasimayari at May

西朋 26

1999年4月発行

発行者 西朋登高会 (会長 山野 裕)

発行所 横浜市緑区桂台1-10-2

山野 裕 付 西朋登高会

編集者 高橋寛和・宏子 (遊緑地設計/1999秋開業)

Mail: u_ryokty@interlink.or.jp

HP: http://home.interlink.or.jp/~u_ryokty/

印刷所 東京カラー印刷 (株)

編集後記

山を愛する者達がこの会を支えております。ここにはその活動のほんの一部が載っているにすぎません。

記録があるから山へ行くのではありません。ふと、行きたいなと思うから行くのです。これを読んで、ひとりでも多くの人の足が再び山へ向かうことを切に願います。

高橋寛和 (森林インストラクター/1級造園施工管理技士) 西朋40期

西朋登高会

SEIHOU The Organization of The Climbing